

長崎省吾関係文書（その2）

——「省吾雜記」下——

佐々木 隆

Document Relating to Nagasaki Shōgo II: The Second Half of "Shōgo Zakki"

As a continuation of my article which appeared in *Seishin Studies* 66, I shall introduce the "Shōgo Zakki" from among the Nagasaki Shōgo papers. This section dates from *circa* 1889 to *circa* 1909, and covers a wide range of subjects from political, cultural, social, educational and human areas of life.

In politically related areas, personality and character studies of Itō Hirobumi, Katsu Kaishū, regional differences in Hanbatsu (*han* clique) systems, the advance and development of political parties, their merits and demerits, actual conditions surrounding the bureaucracy, are taken up. As a second generation Hanbatsu bureaucrat, Nagasaki Shōgo also shows deep concern over the problem of alternation of generations in the Hanbatsu.

Concerning international politics he writes of the Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War, and again, of the world situation after the Russo-Japanese War, that should Japan become the leading power of Asia, she would be looked upon as an enemy by Europe and the USA, and would stand isolated.

As a Hanbatsu bureaucrat, Nagasaki Shōgo strove to educate himself, and his thoughts on life, on humanity and teachings regarding conduct of life occupy a large part of the essays. He also wrote frequently on will-power and on the meaning of wealth and honor. He also added thoughts on the significance of the upper classes and on the historical significance of the Japanese warrior class in comparison and contrast with the aristocracy of other nations.

今回ここに採録するのは「長崎省吾関係文書」のうち「省吾雜記 第二」と題する冊子である。「省吾雜記」には無番のものと「第一」「第二」と題するものの計三冊があるが、「第二」は「省吾雜記」の全量の概ね半分を占めている。

「省吾雜記 第二」は美濃紙大の縦野和紙八十五枚に楷書で墨書されており、半分の大きさに和綴製本されている。「省吾雜記 第二」は都合三〇二項から成る。本稿では（その1）同様、整理・検索の都合上、各項の末尾に「○」「△」の如く番号を附している。○の部分のローマ数字の「Ⅱ」は「省吾雜記 第二」を示す。△の部分の算用数字は冒頭からの通し番号である。

「省吾雜記 第二」が書かれた時期は明治二十年代初頭から明治四十年代初頭にかけてである。因みに第3項には伊藤博文枢密院議長の辞表提出（二十二年十月）、第11項～第15項には大隈重信外務大臣の遭難（同）が見え、第296項には後藤新平の入閣の記事が見える（後藤の初入閣は四十一年七月）。この他の各項で執筆年次が推定されるものには註を附しておいたので参照されたい。

内容は（その1）と同様、多岐に亘るが、長崎の政治的地位が上昇したこともあって、政局に言及したものや政治家の人物論に係るものが目につく。殊に伊藤の評価（Ⅱ・3～7、283、284）、勝海舟の評価（96～98、213）にはかなりの紙幅が割かれ、藩閥の地域別類型（29～33、63～67）の記事も興味深い。また、帝國議会の開設後の政党勢力の進出についての感想（48、112、118）や初期議會会期の議員、官僚の実態への諷刺（55、56）なども目を惹く。その他、長崎は第二世代の藩閥官僚として世代交代の問題にも深い関心を抱いており、明治三十年代の記事にはそれが頻りに

見えている（118、246、250）。

一方、長崎の目は広く海外にも向けられており、日清戦争（77、78、80、81、83）、義和団事件（140）、日露戦争（181、182、187、189、200、202）などに深い関心を寄せている。長崎は日本がアジアの盟主として欧米諸国に対抗すれば（或は欧米側からそのように見做されれば）国際的孤立を招くとして極度にこれを恐れており、度々言及している（183、186、228）。日本近代化の問題や女性論でも欧米の価値観に軍配を挙げており（102、104）、長崎の欧米文明への傾斜が窺われる。

長崎は（その1）同様、新世代の藩閥官僚として厳しい自己修練を積むとともに、教養・素養の拡大・深化に努めており、人生論、人間論、英雄論、教育論、諺、金言、処世訓などがかなりの分量を占めている。「意志の力」の意義（136）や上流階級・富貴についての論（159、176、177）、武士の歴史的意義（178、202、203、206、243）についての言及も、日本の近代化との絡みで興味深いものがある。

また、所々に新聞記事の摘録や講演・挨拶の覚と推察される記事が見受けられる。

凡 例

一、載録に当っては各項ともその全文を掲げた。

一、各項には特に標題が建てられていないものが多いので、便宜上各項の末尾に番号を附した。なお「Ⅱ」は「省吾雜記 第二」を意味している。

一、原文の仮名は概ね片仮名であるが、外国地名・人名以外は原則として平仮名に改めた。

一、原文には句読点が僅かしが附いていないが、校訂者が適宜これを附した。

一、原文には濁点、半濁点が殆ど附いていないが、校訂者がこれを附した。

一、各項の頭出、改行は原則として原文に準拠した。このため一部に体裁が不統一の所がある。

一、傍点、圈点、括弧は概ね原文に従った。但し、外国地名・人名を示す傍線はこれを除いてある。

一、「省吾雜記」の筆写・校訂作業には、佐々木の他、史学研究室日本史専攻の次の十七名の学生が参加した。解題の執筆、表記の調整には佐々木が当った。

松下純子（四下次生）、大場直子（四下次生）

小野治子（四下次生）、志摩泰子（四下次生）

田中恵美子（四下次生）、山本喜和子（四下次生）

安野潔子（四下次生）、米澤明子（四下次生）

阿部理恵子（三下次生）、天野啓子（三下次生）

稲山玲子（三下次生）、岩崎友理子（三下次生）

熊沢直子（三下次生）、森田継子（三下次生）

大友玲子（三下次生）、吉成節子（三下次生）

吉岡恭子（三下次生）

省吾雜記 第二

○政事家たるもの事を成さんと欲せば、必ず先づ信憑すべき人物と共に協賛せざる可らず。面従、後背、反覆計る可ざる人物と大事を共にする者あらず。

II 1

○各国帝室費 本年度に要する各国帝室費額は露国帝室費八百三十拾万弗以下略す。土耳其国帝室費六百拾五万弗、奥国帝室費四百拾五万弗、李滯国帝室費三百万弗、伊太利国帝室費二百四十拾万弗、英国帝室費二十拾二万弗、西班牙国帝室費百八拾万弗、白耳義国帝室費五十拾万弗なりと云ふ。

II 2

○古人句あり、曰く、一片花飛、減却春と。廊廟の人物に富むは春花の爛漫たるが如しと雖ども、伊藤伯愈よ勇退せば余輩亦た此句を誦せんとす。伯の内閣に在るや十有七年、其の立法才略に富む、推して当世第一とす。行政才略と果斷英決に至ては同伯独り其長を専らにすと言は然れども、深く一國の前途を慮り法を立て、制を定め其進むに過ぐるものを抑へ其の後ろに失するものを推し国事をして恰好適度の進歩をなさしめ、以て今日あるを致せしものは同伯既往の功勲蓋し多きにあるなり。

II 3

○伊藤伯の辞表に付ては世間種々の説をなす者あり。或は曰ふ、条約改正に異論あるが為めなりと。或は曰ふ、藩閥門の競争に慊焉たらざるものあるが為めなりと。或は曰ふ、内閣一致断行の決心あるに伯が十分力を合せざるを

非難するの声高く之が為め朝に在るを屑とせざるなりと。或は同伯の辞表は内閣組織上大に望む所あるが故なりと。

II-4

○明治政府に於て大臣の辞職は甚だ珍らしからず。事にして二十余年間に指を屈すれば其多きこと幾回なるや知らず。唯政治の一方に身を寄せて進退を苟もせざるの聞えある伊藤伯にして此事ありしは少しく其平生に似ざるが如くなれども、時の模様により進む者もあれば退く者もあり。政界の常にして毫も怪しむに足らず。

II-5

○伯は後來如何に身を処せらるべきや、是れ観測の頗る重要と為す所なり。今や政治家の野に下りて行ふ所尽く同じき能はず。或は中等以下の人民を煽動して以て一意に政府を攻むるあり、或は富商に結託し豪農を収攬して以て隠然社会の實力を握り之に由て政府を攻むるあり、或は壮年客氣の徒を集めて世上を騷擾するあり、此の如きは皆な伯の断じて為さざる所たること吾輩之を保證するを得べし。伯は重厚慎動を旨とし危道を踏み権略を行ふが如き、其最も擯斥する所たるが故に、彼の放言壯語して以て愚民の喜を買ふが如き暴客壮士を驅て社会を騷擾せしむるが如き挙動に出でざるは火を賭るよりも明なり。

II-6

○伯は朝野負望の厚きのみならず、畏くも陛下の御覚極めて厚きやに漏れ聞けば、陛下の深く惜ませ玉ふを憚らず同僚諸公の勧告を用ひずして何ぞ肆に其身を退かるべきや。伯が帝室に忠順なる、伯が国家に誠実なる、必ずや再び起て一臂の勞を取らるべきを信ず。左れば伯が進退出処執れに決するも、其事たる、極めて穏靜平和にして決して世人の想像するが如き變動を生ぜざるは吾輩之を予言するを得べし。

II-7

○謹慎にして方正、博学にして多識なる報知記者は豈に吾輩の間に答ふる能はざるものならんや。思ふに別に其理由の存するものあるべし。他人心あり、吾輩之を耐度するに、記者の意蓋し左の如きに外ならざるべし。「日本」記者の如きは名声もなく地位もなく財産もなく智識もなく、又た毫も勢力あらず、斯る貧賤無爵後進の記者に向て教を与

るは老成の紳士たる我等の屑とせざる所なりと。記者は英國の貴族を以て自ら居るの人なり。其主義も亦た貴族主義を以て骨子と爲すものなり。則ち吾輩の如き平民記者は其の教を受ける資格なきこと固より其の所なり。然りと雖ども紙上に国事を論ずるは宴席に雅趣を話すると同一にあらず。貴賤の別、貧富の差、賢不肖の違は之を問ふに及ばざるが如し。貧賤不肖にして平民記者なる吾輩の如きも、若し疑を質すあらば貴族記者一言以て之が蒙を啓く、亦た善からずや。且つ君子慈徳の一端なり。西洋の礼法英國の風儀は吾輩の固より知る所にあらずと雖ども曾て西教の大略を聞くに、教化して以て道を弘むるには固より貴賤賢愚の差を以て之を輕重せざるに似たり。記者亦た常に西教弘布の有益を主張する者にあらずや。然れども人各其の所爲に自由あり、吾輩に決答を与ふるも又与へざるも皆な記者の自由なり。吾輩固より強て之を請ふの權利を有せず、又強て之を望むの要用なし。記者若し決答を与へざれば、吾輩は敢て不遜を顧みず記者は辭窮し理屈して答ふる能はざる者なりと断定せんのみ。

II - 8

○政治熱の爲めに一心に思ひ込む所ありて斯る非拳に及びしものなるか。左りとは不心得千万なりと云はざるべからざるなり。設ひ如何なる目的を有するとも、又如何なる時勢なりとも暴は即ち暴なり。兇は即ち兇なり。法律に道德に誰か之を許さんや。

II - 9

○外務大臣の遭難に就て我邦人民は何等の感想を喚起すべきや。第一は我邦の政党が争競の方法を誤れる事を覚知するならん。第二は我邦の人民が政教の區別を紊亂したる弊害を覚知するならん。第三は暗殺兇行の煽動者は下等社会に在らずして却て上等社会に在る事を覚知するならん。若し夫れ社会が此等の弊害を覚知する以上は十分の匡正を加ふることを勉むるや言を待たず。

II - 10

○言論の常に身上誹謗に涉り人をして異説抗敵の外に憤怨恨毒の惡意を發生せしむるの傾向あることはなり。II - 11
○前人が未だ曾て成し能はざるの大業を成し、日本をして多年の大辱を免れしめるが爲め斃て而て止むは大臣殉国の

節のみ。死生命あり、成敗天に属す、又た何ぞ独り警戒に是れ頼らん。

II - 12

○此度の条約問題起るに及び、外には衆論の囂々たるあり、内には廟議の未だ帰一せざる世評あり。強敵たる諸大國は容易に我が請求に応ぜざらんとす。左難、右難、此の崩浪、頽波の中に立ち、君が百難を排し、屹然動かず、進むことあるも、退くことなきに至り、世人始めて君の胆が無双なるに心折せり。

II - 13

○凡そ平生無事の日に於ては人皆な矯飾^{けうし}に至らざる所なし。但一たび其心を喪ひ、痛苦の爲め精神恍惚たるに及ては其の常を失せざる者幾希なし。而るに君が負傷の始より施術の後に至る迄煩悶^{はんもん}、痛苦の中に在りながら、其言國事に慈愷^{じがい}に同僚諸公に友愛、孝養、尽忠ならざるものなし。嗚呼何ぞ其創の惨なる、其言の温なる、此人にして此変あり何ぞ其の不幸なる。

II - 14

○國を利せんとするの心を以て國を害するの行を爲す、其愚は憫むべく其志は悲むべし。抑此如き無智の人をして其一身を殺し以て國利を害せしむる者は誰ぞや。夫の放言詭弁^{けいべん}、虚偽百端妄りに筆舌を弄して人心を煽揚し、是を以て快を取るの徒之をして此に至らしむるのみ。

II - 15

○世上所謂る治乱の体を知らず、方今の勢に通ぜずして、勿皇私利私欲を謀るの俗士多く國家安危の大計を遺すれて一意朋党比周の邪念を逞ふし、口能く憂國慨世の論を吐くも、心常に功名嫉妬の情に制せられ、國家の多事を奇貨として社会人心を煽惑せんと試むる奸惡の輩到る処に跳梁跋扈するあるを、吁誰れか洛陽当年の賈生となりて、鯁直時弊を指陳し以て此狂瀾滔々の勢を支ふる者ぞ。

II - 16

○起死回生の靈藥も、病症によりて大効あり、巨害あり。干将莫耶⁽³⁾の名劍も亦た時に正人君子を殺すの毒刃たるを免れず。苟くも邦家の大計を講ぜんと欲する者は須らく先づ其國勢民情の趨向を察して而後之が对症の良劑を求めざる可らず。

II - 17

○今や本邦の形勢外には外交上の困難既に多きに加ふるに内には内治未だ全く整頓せず、動もすれば人心洶々の憂あるを以てす。実に是れ内外多事邦家多故の時代なりと云はざる可からず。吾人今日の帝国臣民たる者豈に嘗だ前漢の少年欧米の政治家が爲す所のみを爲し行ふ所のみを行ふて足れりとせん乎。当さに之を兼ね備へて内国勢を振起し、外国威を顯揚するの大任を尽すべき也。吁今の日本人民たる者其責亦た重い哉。

II - 18

○今に及んで猶は国家を泰山の安きに置く能はざるの歎あるは抑も何ぞや。蓋し時非常の時にして非常の事あり、廟堂君子の英明を以てするも尚ほ時に処置其意の如くなる能はざるものあるを以て也。

II - 19

○伯が硬直誠忠なるは今に始めぬ事なるが、殊に近來国家至難の衝に当り、上は聖意の安泰を慮り、下は國民の休憩を鑑み、外は強国の侮慢を圧し内は世論の囂々を制し、左顧右盼俯仰座作ともに之を忽にせず、誠意慎勉傍ら英気を鼓し以て事に従ひしは心ある者の敬服畏尊に堪へざる所なり。

II - 20

○断行論者の面前に出れば故らに穩当切実の語氣を以て賛成論を排立て、中止論者と膝を接すれば殊に慷慨悲憤の口吻を以て非難説を吐散し、僅かに一枚の短舌を千変万化に綾釣りて、浮世を茶かすこと恰も是れ長々たる池畔の楊柳吹くがまに／＼東西に風靡すると一般胸中毫も成竹無きに出鱈目の法螺を吹飛して媚を双方に献すること○○^ア輯間に異らず。

II - 21

○内閣にして鞏固ならんか、施政の方針常に一定して枢機の運転極めて円滑に内治、外交、財政、軍務事に当り物に触れ之を措置する、恰も響の^{「格調」}声に従ふが如く、臨機応変毫も拘泥する処なかるべし。之に及して^{「弱」}脆弱ならんか、政柄把握の権力弱く、事毎に^{「格調」}躊躇し物毎に逡巡し討論評議の間に日子を費して施政の大機を過ること蓋し尠からざるべし。実に内閣の強弱は國家全体の休戚に關し國家全体の休戚は一国臣民の安危に係る、豈等閑視して可ならんや。

II - 22

○頼み難きは人心なれば何時までも良いは、で居らるゝ次第のものにはあらず。彼是する内に嫉妬心の劇しき政治家でも出る様なことがあるに於ては常に此の嫉妬心の為めに凡ての政略を邪魔せられて物事が出来かゝりては破れ、成就しかゝりて蹉つくと云ふ様弊害が往々あるに至るべし。

○勉強は幸福の母なり、注意は其従者なり。

○令名は価の知れざる宝なり、之を守りて瀆すことなかれ。

○智識なき熱力は狂気なり。熱心なき智識は無力なり。

○智識は日進動の活物なり。道徳は万世不易の定則なり。道徳の善悪は智識の開否に伴ふなり。「バックル」

II - 27

○毎春觀桜会御催の後兩陛下眞の御微行にて京都へ行幸啓あらせられ、都下の人民其恵沢に浴し独り皇室に於て該地方の人心を収攬せらるゝのみならず、益々列朝の帝徳を感戴すべく、且時々東西御住所の転換するを以て眼界を新にし、御衛生上にも極めて相適すべく、亦之れが為めに京都御所を始め離宮等の維持方も自然行届き、旁々諸事好都合なるべし。併し此挙御実行在せらるるに付須く深思熟考を要すべきは費途の一点に在り。抑從來各地御巡幸若しくは行幸の如き御用度の夥多なるは勿論、官民間に於ても多少の失費を免がれず。実に如斯有様にては仮令其事柄の美事たるに拘はらず、到底永く恒例とすべきは覺束なきなり。因て其辺は何とか時世適宜の方法を設けられ、御手許に御不自由在らせられざる限りは百事簡易を旨とせられ毫も人民の感触を損ぜざる様注意し、同時に又一方に於ては必要なる供奉員の外無用の冗員を停められ、巨額の費用を要せずして前段の御趣意も貫徹し、永遠に之を維持するの見込も容易に相立可申歟と愚案致候。

II - 28

○薩長土肥四州人士の氣質及徴候を弁ず

抑薩長土肥四州人士は、夙に尊王の議を唱へ、皇政復古の鴻業に与りて偉常の功を奏せるに依り、朝廷の恩寵を蒙り

政府の要官に班列せる者巨多なるを以て、世人目下の政府を評して閥閥政府と爲し、且其人毎に就き交々毀譽褒貶するに至る。是畢竟人の天性に剛柔寛嚴の別あり、其の俱に具瞻の地に在るも公私の行為各異ならざるを得ず。從て他人の感觸する所亦同じからざるに職由するものにして亦已むを得ざるなり。故に該四州の人士中其氣質及徵候に於ける形以上に表るゝものに就き判断を下すときは万般のこと彼は長短異同あるは亦免れざる所なりとす。今試に管見を以て是を概論すれば左の如き理由ありて存する歟。敢て大方の垂教を乞ふ。

II - 29

○薩州人士の特性たるや度量豁大人を識り能く任じ叨りに小事に齷齪せず。大事を断ずる宛然利刀を以て盤根錯節を剖截するが如く、毫も遺憾あるなし〔欄外註「眼光如素鏡」〕。国家棟梁の臣として敵然たる威儀氣象を存するは世の挙て許す所なり。然れども自己精神の方正なるより人を信ずるの厚き或は甘言に惑ひ黑白を判別するの識量を闕くの嫌なきにあらず〔欄外註「英雄頂門一針」〕。是所謂明鏡の塵点と謂つべき歟。尚玉石鑒識の明に意を用ゆる事あらば一層の威儀風采を具ふべし。

II - 30

○長州人士の特性たるや機敏活潑頗る權略に長じ、事務を処理して遺算あることなし。然れども其人と爲り概ね猜忌苛察にして、且往々名利を是れ事とし或は倭幸に親しみ品行を損ずるの嫌ありて国家柱石の臣たる資格を欠くものあるに似たり。是所謂璞玉の微瑕なり。惟ふに鞠躬反省して以て要務を鞅掌せられれば方面に任じて他に比類なかるべし。

II - 31

○土州人士の特性たるや素豪佚宕漸く過激に傾く風あり。就中才識に富み智計に長ずる、其人鮮からざるも我が持説を主張するの僻習ありて、他説を容るゝの度量に乏し。故に或は要路の擯斥を免れず、然れども百折不撓の精神を有するは特殊なるを以て之を鼓舞作興するに其道を以てし寄托するに干城の任を以てせば、大に国家の元氣を發生して衆望を係属するに足るべし。

II - 32

○肥州人士の特性たるや耿介不羈、稍々局量偏執の傾きあり。偶々学文に長じ法理に通じ且事務を調理するの才ある、其人なきに非ざるも徒に議論を好むの風習ありて実績を奏すること稀なるに似たり。故に学文あるものは所謂優遊不斷に失し法律に通ずるものは彼の刑名の術を以て統御の策を得たりと爲すに至る。然れども陶冶其法を得ば国家有為の人材輩出するに至るべし。

II - 33

○当時の執政は雄弁家の聞えある人物にして議論極めて巧みなり。さりけれども其の心事は大に測り易からざるものありて当初にありては君等の説と相同じきものゝ如くにして到底は其の帰着を異にせり。紆余曲折の間に君等の論鋒を曲げんと計ること数回に及びたれば、君等も其の駁撃には大いに苦しまれたり。

II - 34

○周旋の劳尺寸の効をだも見るに至らざりしは無念の事なりし。

II - 35

○正義派の人々は満腔の忠心も吐くに処なく行ふに地を得ず。動もすれば敵党の逮捕を受けて不測の患害身に及ぶんとす。仰いで郷関の山を望めば万端の雲霧嶺を掩ひたり。俯して低弱の身を顧みれば千緒の憂愁心を絆へりと云ふ紀納言の句の心も今の我身の上にこそと腸を断つ齒を切らざるも無かりける。

II - 36

○事終れり時去れり。宇内を捧ぐ君が身も、世界を照す太陽も、今は地下にと入りにけり。

II - 37

○多病の才子は余輩の望む所に非らず。健全の身体を以て健全の精神に伴はしめざるべからず。一医あり、曾て人に告げて曰く、我に不死の妙法あり、人能く之を守らば以て死なかるべしと。或る人問ふて曰く、人生七十古来稀なり、秦の始皇は万里の長城を築くの勢を以て不死の薬を求めたれども能はず、然るに今足下此法を得と称す、名医の言と雖ども信ずる能はざるなりと。医曰く、是れ容易の法なり、唯容易に守る能はざるを恐る、則ち人生れてより食欲色情を制して毫も其度を失はず八時間寝て八時間働き又八時間を運動娛樂の時に供し以て一日も違ふなくんば能く其身の不死なるを得べしと。それ或は然らん、然れども人は情欲の動物なり。如何なる聖人君子と雖ども毫も其度を

失せずといふべからず。孔子の如きも——意の欲する所に従つて違はず——と言ひし時は已に殆ど一生を経過し去りしの後なり。況んや常人の如きは豚魚は食ひたい、生命は惜しく、の間に一身を賭して顧みざるもの甚だ多し。さて今此死と不死との問題は容易に決すべからずと雖ども適宜規定の生活を為すもの長寿を保つべきことは自然の道理にして實際統計上の許す所なり。

○既成に逐ずして未然に防遏するは今日の急務なり。

○本地垂迹 ○報本反始 ○安心立命

○繼承の遺業

○演習中殊に注目すべきは戦術の發達、各地形利用の巧妙、開進の精妙、諸運動、就中砲兵運動の至正、其他斥候并に搜索勤務等なり。又た甚だ適意せるは軍隊の静肅なる姿勢、散開戦闘に於ける良好なる火戦、軍紀沈黙して服従する事、操法の確實、車輛運搬の整頓等とす。凡て非常に剛勇なる外見を呈し、何れの時期に在ても力めて実戦を模擬せん事を計れり。

○旅行中の愉快なりし事柄、可笑しかりし事柄、苦しかりし事柄、五月蟬かりし事柄、喜びし事柄、立腹せし事柄等を記載す。

○其第一を軍備の必要と題し、有生者は必ず相争ふ事を免れず。故に其争はんと欲する者は必らず全力を此に注いで勝を博せざる可らず。全力を竭さんと欲せば万般の準備を怠るべからず。万般の準備を為さんと欲せば国民挙げて之に当らざる可らず。国の強弱は其国が他の国々に対する真正の価値なり。今日の宇内俱載の裁判所なき以上は、両国間に於ける紛擾の終結は戦争と云ふ大命裁判に訴へざる可らず云々の旨を詳論す。

○戦争の費用并に死亡者

古来戦争の爲めに人命を失ひ金銭を費せし事挙げて計ふ可らざる程なれども、仏国及独逸の統計家の概算に従へば、過去三十年間の諸戦争に於て人命を失ひし事二百二十拾五万人、金銭を費せし事百三十億弗にして、此内凡そ三拾五億弗は仏国が普魯士と戦ひし時に失ひ、同戦争中仏人の死亡拾五万人の多きに及べり。其内八万人は戦場にて命を失ひ、三万六千人は病氣、偶然の出来事、自殺の爲めに死去し、其余は種々の原因の爲めに死亡せり。而して独乙の官吏ヒス氏の計算を見れば、同戦争中独乙の戦死者及び廃人となりたる者は六万人にして、其費用は仏国の払ひたる償金を引去るも尚六億弗を失へり。又有名なる独逸の統計家エンゲル氏の概算に拠れば、「クリミヤ」戦争の費用は二拾億弗、千八百五十九年の伊太利戦争は二億弗、千八百六拾四年の普魯士・丁抹の戦争は三千五百万弗、米国内乱は北部五拾一億弗、南部二十三億弗、千八百六十六年の普墺戦争は三億弗、露土戦争は一億二千五百万弗、南亜非利加戦争は八百七十七万弗、「セルヴィヤ、バルガリヤ」戦争は一億七千六百万弗なり。以上の戦争は血を流せし事夥しくして「クリミヤ」戦争は七十五万の人命を失ひ、米国南北戦の時は戦死者及び負傷の爲に死せし者七拾万人、露土戦争は戦死者及び重傷者二拾五万人、千八百五十九年の伊太利戦争及び普墺戦争は各四万五千人なりと或英字新聞に見ゆ。

II 45

○吾人は果して公の実際の評価を為すの識あるや否やを知らざれども、若し吾人をして遠慮なく謂はしむれば、公は剛鉄の腕山をも動かすの力ある政治家にも非らず。癡癡たる明眼千古を看破するの識ある政治家にもあらず。経綸縦横に湧き、權謀詭略自在に生ずる政治家にもあらず、否な公は真実の意味に於ての政治家に非らず、若し公を政治家と称し得べくんば、公は吾人の所謂調和的政治家なり。

温良恭謙讓の美質あるものは誰にても調和的政治家たるを得べきか。温良恭謙讓を備具したる政治家なれば、實を以て料り石を以て量るを得。此位〔辭〕の政治家なれば、寒村避里の茅屋中に於て数へ難き程あるなり。思ふに三条公が能く

調和的政治家たりしは公が温良恭謙讓なる上に死して尚ほ国家を忘るゝ能はざる丹誠純忠の心情ありしに依らずんば非ず。II-46

○山田伯の近作。去冬⁽⁶⁾商法延期の議貴衆両院を経過して内閣も直さま之を納れ遂に延期に決するや、憤然辭表を上りて鎌倉に赴きたる山田司法大臣が同地に滞在中の作なりとて或人より投寄し来りたれば、

少壯出国跡縦横、尽力鞠躬在一誠、立憲治民不容易、負任成務要分明、褒貶素甘當時議、得失永期後世評、回頭三十年經歷事、病牀揮淚拜禁城

憂愁滿胸歳將更、一枕幽然無限情、忽拜龍顏言未尽、鴉声破夢報天明II-47

○我国民よ、幸ひに第一期帝國議會を通觀して其喧囂なるに失望するなかれ。其騒動なるに失望するなかれ。其不規律なるに失望するなかれ。其不統一なるに失望するなかれ。其乱雜なるに失望するなかれ。其紛擾なるに失望するなかれ。失望すべきものは他に在り、公明正大を欠く所是れのみ。第二期帝國議會をして完良なる議會たらしめんと欲せば、夫れ注意を茲に加へざる可らざるなり。II-48

○文勝質則史質勝文則野文質彬彬然後君子II-49

○無偏無陂遵王之義無有作好遵王之道無有作惡遵王之路無偏無党王道蕩々無党無偏王道平々無反無則王道正直会其有極帰其有極II-50

○子曰君子之於天下也無適也無莫也義之与比II-51

○「アーノルド」氏は曰く、日本人は精神快活にして世界中に最も恐怖せざる、最も自尊心ある、最も高尚の心を有する、最も寛仁大度なる、最も名譽を重んずる、將た最も性質の勝れたる国人なりと評し、而して、「ブリーケー」

氏は曰く、日本人には恒の心なきこと恰も荷物を積まざる船の風のまにまに西に向ひ、又東に向ふが如し。智恵才

覺に富みて甚だ活発なれども、一定の主義とする所なく結果を待つゝの堪忍力なし云々。約言すれば、氏の云ふ所は他の長く在留せしものゝ考ふる所と同じく、日本人は時に或は優美なるが如くに見ゆると雖どもそは只だ表面だけ然るのみ、内心には聊も其根本たるべき智識意想及び性情あるに非ずと云へり。

II - 52

○身分不相応の奢侈は常に金錢上の不都合に止まらず、懶惰、臆病、腐敗、詐偽等諸の惡徳を醸し出すの泉源となり、社会の生存に最も忌むべき弊風を来たすの媒にして、特に今日の日本国は既に世界の大勢に後れて、是より奮興、進せざる可らざるの急機に當るものなるに、斯る惡徳を誘致して国家生存の前途を如何す可きや。国俗の盛衰消長は關する所頗る大なり。勤勉、敢為、活発、公明の善徳を養ひ、從來の弊風を一洗するは第一着の要務なるべし。

II - 53

○拿破崙第一世が普国を蹂躪して馬蹄の塵となしたる時、当時の英傑スタイン及び、シャルンホルスト等が、千艱万危より根本的兵制改革を實行したるに成り、維廉老帝起ち、ビスマルク、モルトケ、ローン等の人傑胆を嘗め、戈を枕にし、日夜屈辱を雪がん事を思ひ、奮て実用的軍政を振興したるに成るにあらずや。英国が根本的兵制改革を實行せしより、普国の人民、兵役を以て榮譽の源と為し戦争を以て功名の泉と為し富貧貴賤を問はず丁年に至れば国家の為に銃を肩にして卒伍に列し兵營に入り、戦争あれば剣を無して起ち身を殺して仁を成す事を辭せず。役解け郷里に歸るの日忠良誠実の民と為り精神勇壯品行嚴正社会の風紀を扶持するに至る、是れ戦争を以て文明の開導者と為し道德の扶植者となし風俗の矯正者と為すに非ずや。

II - 54

○御免を蒙むる議員の種類

人を責むるに酷にして自ら待つに寛なる議員は御免を蒙る。

党派あるを知りて国家あるを忘れる議員は御免を蒙る。

議院は神聖など云ふ口の下から神聖を汚す如き無礼無法の言論を吐く議員は御免を蒙る。新年の参賀に際し宮中の典式に就て彼は不足の間敷事を申出する如き不臣の議員は御免を蒙る。

無根の事実を誣て反対党を毀けんと試むる如き卑劣議員は御免蒙る。

自己の多血なる脳髓を差措き紫色の蒨蕸板⁽⁷⁾に知恵を借る議員は御免蒙る。

経済は国防に最大關係を有する鉄道事業を今日の衰弊に一任し、之が救済を謀らざる如き不信切の議員は御免を蒙る。

監獄費国庫支弁とするは地方の負担を軽くする良政策たるを認めながら、此策に従はざる如き迂闊議員は御免を蒙る。

曾て丁汝昌が引率したる支那艦隊の壯觀に肝を潰したる癖をして、我海軍事業の拡張を妨げんとするに至ては我其何たるを知らず。此の如き議員は御免を蒙る。

福岡・大分・富山・新潟等河川多き地方の水害は年として慘澹の状を極むるにも拘らず治水の費用を出す事を拒むが如き吝嗇の議員は御免を蒙る。

尾濃地方に於ける古今未聞の震災⁽⁸⁾に対し、之を救済する緊急問題を忽諸に付し恬として異しまざる如き残忍無情の議員は切に御免を蒙る。

薩長政府なれば之を非難し、土肥政府なれば之を擁護せんと勉むる身びいき議員は御免を蒙る。

己れ曾て金を借り尽し最早一錢も出所なきより実業家に御用商人などの名を附し恩を仇に返さんと企てる背徳の議員は御免を蒙る。

ちんちう動議⁽⁹⁾や前後はことんと云ふ新熟語を議場に振時く如き博学議員は御免を蒙る。

訳の分らぬ屁理窟を議場で囀つる雀の如き議員は御免を蒙る。

自己の編制したる議事規則を自己に破る如き乱暴議員は御免を蒙る。

横議詭言を放ち、動もすれば国家の大憲を侵凌せんとするの恐ある議員は未来永劫断じて御免を蒙る。

○御免を蒙むる官吏の種類

事務官でありながら政党内横目を遣ひ、席を空にして奔走に日を暮す官吏は御免を蒙る。

仕事自慢に知らず識らず秘密を漏し、他人の重宝となる官吏は御免を蒙る。

上に向ては匍匐せぬ計りに卑屈して、下に対しては後に倒れん計りに傲慢なる官吏は御免を蒙る。

万事に噪がしくして慎重ならず、或は屁でもなき事を勿体振る官吏は御免を蒙る。

何でもなき事に旅行したが、旅行すれば帰るともなかる官吏は御免を蒙る。

本職をお留守にして長官殿の囲碁のお相手や奥様、嬢様のカルタ付き合ひを大切にす官吏は御免を蒙る。

暖炉の前に吹煙しながら新聞を展べて太平楽を吐くのらくら官吏は御免を蒙る。

午砲前に登庁して弁当を待遠しが、箸を下に置けば時計と睨みっこして帰りがる官吏は御免を蒙る。

詰らん役でも我職分として自ら敬重するの意なく、万事抛げ遣りにして常に不平ある官吏は御免を蒙る。

高利貸に途に要せられ時々裁判所のとまり木に御辞儀する官吏は御免を蒙る。

議会に出で無言又は拙弁の官吏は御免を蒙る。

官禄に衣食しながら扞げて政府攻撃的の言論を弄し、独り得々たる官吏は御免を蒙る。

立憲の昭代を忘れて意張りたがる専制臭気の官吏は未来永劫断じて御免を蒙る。

○識善く人を知り善く人に任ずるの識。

○量善く人を用ひ善く人を容るゝの量。

II 58

○略善く事を謀り善く事を成すの略。

II 59

○胆善く事を決し善く事を行ふの胆。

II 60

○人を得るものは能く人をして死せしむ。人をして死せしむるに足るの至靈至妙なる意気なきものは真正経世家にあらず。

II 61

○活機活勢の局に当る。

II 62

○薩州政治家は実行的、統理的の脳力に富む。而して果断的、義侠的の気象を有す。其弊往々人を容るゝの量を欠き勢を見るの識を欠く。

II 63

○長州政治家は先制的、機略的の手腕あり。而して智謀的、利用的の才幹に長ず。其短堅忍の徳無く、動もすれば難を避け責を避くるの風あり。

II 64

○土州政治家は理論的気象あり。

II 65

○肥前政治家は幹事的気象あり。其弱点土州政治家は空理的急躁に失し、肥前政治家は平和的因循に失す。

II 66

○急進の手段は直に国務を料理し治道に与らしむべき者に非るも、其政を執て権柄に慣れ榮華に耽り偷安を事とし小成に安んぜざる者に対しては誠に病に対するの薬積鬱を掃ふの驟雨到底なくてはならぬ極有効の者なり。

II 67

○大凡政府の官吏公務当今の弊は緩慢なるにあり、怠惰なるにあり、氣力凋萎せるにあり。所謂属僚横議して紀綱解弛するの弊甚だしきなり。蓋し前内閣以来特に然るが如し。此弊独り政府部内に止まらずと雖ども、而も伯が大に振刷の効を奏せんとは天下の望む所ならずや。伯宜しく天受の精神氣力手腕を用て整理の効を完ふすべし。

II 68

○羨んで則ち憤り感じては則ち泣くの人情は昔も今も更らずして、然かも一般の多数は情に脆くして折れ易きの常な

るを知らば、今の政治家たるもの強ち人を泣かしめざるまでも責めては人をして羨ましめざるの手心こそ肝要なれ。
敢て多きを望むに非ず。唯浮世の政治家として余りに世情に反するの行なからんこと勸告するものなり。

○怖はき者には親しめとの原則云々

○碑石の基礎を打ち、死者を記念する為め、生者に感謝する為め而して後生子孫奨励の為め。

○常教の脾要、安心の一途。

○後生安堵の思より報国の忠意、尽くすべし。

○内思慮を勞し、外風霜を冒し神身疲勞。

○或る經濟家の話

金は善きものや悪きものやと問たるに、善きものなり。如何となれば金は時間と勞力の切手なればなり。之れも又、
培養の道なければ増殖する事能はず。夫れ之れを培養するの道は正直と知恵とにあるなり。

○客歲十一月十五日、余等相謀て贈正四位吉村寅太郎外拾五名、大和殉難三十三忌辰⁽¹⁰⁾の祭典を挙げ、又墓碑修建し、
聊其靈を弔慰せん事を謀る。因て皇室の恩賜あり、有志者の義捐あり、速に工竣へ、今や建碑式を挙げんとす。余、
偶々公務を帯び、此地を過ぎ、其式に列するを得、豈今昔の感なきを得んや。諸士は王事に率先して維新の偉業を翼
助したるも、聖世の鴻沢に浴するを得ず。洵に痛恨に堪えざる所なり。然りと雖も、其秋霜烈日の赤誠は永く此碑に
勒し諸士を不朽にせり。諸士また以て瞑すべし。爰に聊か蕪辭を陳じ以て諸士を追弔すと云ふ。

○抑々今回李鴻章氏が高齡にて長途の旅行にも慣れざる身にて、能く此思立をなしたるは、再新の大謀を實したるに
相違なければ、吾人英國人の如く支那の盛衰に就て利害の相關する、本国人にも劣らざる程痛切なるものは力の及ば

ん限り利害得失の在る所を講究するは吾輩の義務なりといふて可なり。又其事業の困難を認めずして雑作もなく、咄嗟の間に易々たるみといわんは輕薄の挨拶にて我大賓を待つのだにあらざらん。

李氏が天賦の才能、威儀、樽俎の間周旋、度、に中るやと云にはあらず、氏の力量、威望、能く帝国、再新の経画を企図して其功を奏するや否といふに在り。

顧ふに彼大役たる、独り有形上多少の戦経、を失ひ莫大の償金、を強奪せられ海關税の金額を没取せられしのみならず、無形上從來中華と稱へ、独り尊大自ら居たる、威嚴を失墜したる此屈辱は、支那が死灰再燃の期あるに非ざれば伸雪するを得る時なきを悟りしならん。

日本は夙に泰西の文物を輸入し慕倣し時勢に後れざりしも、支那は旧態を墨守し、尊大倨傲、日新の道を講ぜざりし罪によりざんばあらざるなり。

II 77

II 78

○為人剛健胆略あり。平居人に対する温顔優容其在朝事を議する辞色壮励侃々言を危ふす。

○嵯峨大覚寺

析 願 文

今上皇帝 玉体安穩

皇威震張 万国帰順

文武百官 忠誠堅固

宮内靜謐 上下和睦

天変地妖 未然殄滅

転禍為福 如意吉祥

風雨順時 五穀豊登

祈願文

今上皇帝 宝祚延長

玉牒安穩 諸願円満

文武百官 忠誠堅固

宮内靜謐 上下和睦

天災地妖 未然殄滅

転禍為福 如意吉祥

風雨順時 百穀豊登

II - 79

○従来清韓に事端の起るあるや我武威を海外に発輝するの時来れりとなし、予亦軍人として大に之を主張せり。然れども予は常に事を構ふるは好し、只だ夫れ軍資の支途を如何せんと云へる平和論者のために破られ幾度か恨を吞んで屈従するの止むを得ざるに泣き、又然るに意外なりしは今回の清国膺懲の師なり。初め出兵の議起るや、曾て幾度か逢ひし困難は独り今回に於て拜せられ茲に軍人として多年抱懐せる志望を達するを得しは、予の喜んで止む能はざる所なり。而して此困難の独り今回に排せられたるは如何、二千万円の剰余金は国庫に存したるに外ならず、二千万円の剰余金より今回の軍資中僅に其の一部に属すと雖も、最初の出兵をして容易ならしめたるは全く此剰余金あるに依るなり。

II - 80

○明治二十七年清韓事件

国庫に二千万の剰余金ありたること。

軍隊中に十年の変乱に実戦の経験ある士官と新教育を受けたる士官とありしは、軍隊の面目を高めたる一原素なるべし。

支那教練の士卒按外虚弱なりし事。新募兵は云ふ迄も無之事。

支那海軍は陸軍に比し精練なる事数等上にあり。

○苟安機先を失ひ姑息は駕馭の鞭策を遺る。示威脅赫の罩に陥りて旭日の冲天を挫折したるの事例は欧州の歴史に徴して瞭かなり。

II - 82

○二千五百有余年の歴史を有し、全顧欠く無きの帝室を戴き、風雲適々際会して、古今例し少き此一大機会に投合す。且降天の福利落ちて吾人の目前に迫る。是をしも取らずんば、將た何をか取らん。若し区々たる掣肘に牽拘せられ子孫万世の侮辱を遺すあらん。

II - 83

○先輩の言容に接しては、其活歴を尋究し、心術を砥励するあり。

II - 84

○孤立單獨は人理に反し、共同団結の必用なることは此に論を待たざるなり。

II - 85

○一国に命の消長汚隆と英雄豪傑の栄枯得失とを顧みる毎に、転た感慨の念寸胸の間に集まりて禁ずる能ざるものあらんとす。

II - 86

○日清間戦争に付外国人の意見

一、今日迄一般欧米人の支那に対し識見届かざる所、偵察の足らざる所を、日本は已に其内部の不整頓志気の振るはざる所を看破し、支那現況を遠に見貫き居りたるは感服の外なし。欧米各国は支那帝国の面積と人口とを以て其強弱を判断せしも、日本は其内部不整頓則ち陸に海に容易に軍隊兵員を充員し要所々々に出兵する事能はざる事是れなり。

二、日清軍人の精神教練の異同は是れなり。支那人は稍々大砲小銃の射術に訓練の所あるにせよ、戦闘上鮮血を見るに至らば直に精神潰乱其為す所を知らず、之れが為め乱発目的を誤り敗を招くなり。日本は之に反し精神と教練と並行し、戦闘場裏に於て指揮誤らず、射撃乱れず之れ其勝を制する所以なり。

三、日清軍人志氣の異同は戦闘上に於て明に判断を下す事を得るものなり。今仮りに爰には戦闘を三段に分たん。則ち第一は戦闘準備、第二は戦闘、第三は追撃是れなり。今般日清軍隊の戦闘実況に就て評せば、両軍相向準備より砲撃を進め漸次戦闘に至らんとする時は支那兵は多くは潰乱し戦争酣ならずして其勝敗を決するに至る。之れ全く支那兵の志氣に乏しき精神喪失し、勇氣不足なる所以なり。

四、日本兵は將校下士卒に至る迄で揃ふて能く軍紀を守り、能く艱難に堪え、食糧の如何を問はず、兵衣の如何に拘はらず勇往奮進唯一死君に忠國に報ずるの至誠を致さんとするの現象あり。是ぞ所謂和魂ならん。然るに己を以て他を忖度するは人情の自然、決して咎むべきに非らざれども聊か爰に注意を要する点を挙げて参考に供せん。日本軍人は己の遺伝と養成とを以て組織したる和魂を以て一身の基本とし、此の基本とする所の精神は何物の不足を問はず、如何なる艱苦も口にせず、唯忠君愛國の志を遂げんとするの外余念なきものなり。或は此の精神を以て獸類を判断せん。固より獸類に斯る精神あるを期すべきに非らず。依て日々使役する所の労働に対し飼糧の不足と手当の不充分に依り病馬の斃馬の多数を來たせしに非らざる乎。是れ宜く研究すべき事なり。

五、日本の兵制は自國の地勢則ち山岳の地脈に依り編制せしものならん。依て騎兵は偵察を目的とし独立の戦闘力を有せず。今回日清の戦争に臨み其不足を感じ常に歩兵の援護を受くる事少からず。現に除家屯の役の如きは其一なり。當時騎兵独立の戦闘力を有せば或は斯る不幸に陥らざるも計り知るべからず。是れ今回の実験に依り後來の組織に於て研究を要する事なり。

六、日本軍隊が作戦上に於て其準備と用意とに怠たらず、都て其法則に基き運動上に警戒を加ふるは万一の失策を避くる為めなり。又斯くなかるべからず。然るに支那敵軍の実況を観察せば軍隊統御より交戦の方法に至る迄拙劣なるを以て、或は斯くまでに作戦々術上に於て警戒を加ふるを要せざるべし。宜く臨機応変の兵術に依り時機を失せざる事又肝要なるべし。加之ならず戦争後永く兵を休めば或は軍気を喪失するの憂なからんとす。是れ亦た考究すべき事なり。

II - 87

○海軍

一、支那海軍が日清両国海軍彼我の戦闘力を考究せず、其力微弱なるにも拘はらず運送船の護衛を為したるは大なる過にして是れ今日の敗を来せし所以なり。

二、日清両国海軍の黄海洋に於ける戦争を以て日本の勝を制したる点を深く考究せば、今に調査上の材料不足に拘はらず速力と速射砲の多数を有するに帰すべしと判断せざるを得ざるなり。

II - 88

○日清軍人の差は素養の懸絶○支那人憶病未練の根性○氷の為め水雷発射管を閉じられ○撃沈 逃散せし肉片血滴○突出破壊 沈没 力竭きて○暴風怒濤を凌ぎ○彈丸○捕獲○寒威凛烈○北洋艦隊の残余を率いて降○新鮮の文明国○数千年の老腐儒国

II - 89

○泰かれと育つも国のためと知れ尽し果てなん斃れ伏すまで

II - 90

○分進寸退○竭慮尽誠

II - 91

○「毎日新聞」

(11) ○○侯は一代の政事家として社会の俱に瞻る所なり。維新原動者の年に凋謝するに及び、機に触れ会に投じて勢威日に登り、侯の長き政治上の生活と其機に乗じ会に投ずる俊捷機慧の資性は恐く同年輩諸老の企て及ばざる所なるべし。

し。然ども侯は平生無事の時に泰西を裝飾する宰相にして、百事多難の間に盤根錯節を伐るの政治家に非ざるなり。而して外交に於て常に其畏縮逡巡の陋能を見る。切言するに侯の腦中に外交的機能なき者の如し。侯は弱國に対しては敵手を翻弄するを得意とするも強國に対しては宇内普通の条理すら伸べ得ざる如き者あり。侯は明敏なる外交家にあらざるも亦た頗る巧慧なる政治家なり云々。

○御一門 重留 加治木 垂水 今泉

○四家 宮之城 日置 花岡 都之城

○清国総理衙門 翁同龢 清国陸軍大臣 榮祿

○大江広元は勢の外観る所あらず。勢の強きに就き勢の弱きを去り、徹頭徹尾勢に隸從して、又一片弱を扶け強を挫くの俠骨あらず。身王室の世臣にして王室を覆へして忌むことなく、源氏に登用せられて源氏を滅ぼして忌むことなし。数を挟み術を用ゐるに於て或は海舟翁の上に位すべきも、大丈夫として少しくも稱するに足るある莫し。海舟翁は此と異なり、大勢に隨て時局を斷ずるも事々物々其処を得せしむるに務め、小勢に至りては強て顧慮せんともせず。一身の爲めに計るよりして觀れば、往々にして巧みな能はざるが如き者あり。幕府の未だ窮迫せざりし時大に之に用ゐらるゝを得ず、漸く枢機に与かるを得る、即ち是れ方に滅亡に瀕したりし時翁復た術の施すべきなし。乃ち大勢に隨ひ將に破れんとする幕府を破る恰も敗瓦を壊るが如し。而して徳川氏の爲めに勞する真に到れり尽せり。翁が西郷南洲に由て事を成せる、稍々広元の頼朝に於けるに類する者あり。而も翁や一たび南洲と相容る、則ち終始愉るなく南洲の賊たるを以て之を短とせず。却て大久保等に嫌焉たる所あり。南洲の歿する、之を追弔し之を称揚する、亦た真に到れり尽せり。翁や自ら爲す有るに足るを信じ、而して特に顯榮利達に驕らんとせず。其友南洲と同じく人事を尽して天命を俟ちたりき。翁の若き、豈に毅然たる大丈夫たらざるか。

○我社会の改造せざる可からざるを覚り、武門封建の制度永く保続す可からざるの心既に胸底に決せるが如し。然共先生は人に先だちて光明を暗の中に見認むるも半夜燈を点じて、他の昏眠を驚かすの益なきを知り却て東方の白きを待ちて天下と共に太陽を迎ふるの準備を為し、徐に天運の順環を待つゝの觀念を有したるが如し。是れ先生が鎖港空氣の重囲中に在りて能く危害を免がれたる所以に非ざる乎。先生は時運に先だつの明あり、又た時勢に処するの智あり、此点に於て先生は当時諸名流の魁首と言はざる可からず。

II-97

○戊辰の大難は先生の爲めに一生の困難なる時機なりき。其歴代奉仕せる君家亡滅の運に會し先生は君家を倒すの外形を取りて君家を全くするの方針に出でたり。怯臆戦を畏るの誹、敵に通じて君家を売るの譏は味方の中に起り、甘言を以て王師を騙し恭順を装ふて暗に戦備を為し幕臣と東北の諸藩を煽動すとの嫌疑反對諸藩の間に盛にして一切の攻撃は先生の一身に叢集せり。暗殺は激徒の議に上り非難は詰責のみにあらず。先生此間に処し自ら信じて疑はず。西郷南洲と約して帰順の実を挙げ、其苦衷果して如何なりしぞ。南洲の信義能く征討軍を蓋ふに非らざれば六軍の士をして静肅郊外に留まらしむる事能はず。先生の誠意南洲を感ずるに非れば焉ぞ人心疑惑敵と相見るの間に此約束を実にするを得んや。二老其一を欠けば江戸百万の市民は鉄火の間に叫喚し長岡、会津の惨状を此地に現出せしならん。如何ぞ今日の繁盛を持続するを得ん。而して皇宮巍然として千代田の城松千年の碧を見る所以の者豈二老の誠意相欺かざりし紀念たらんや。

II-98

○当時三河武士の血を遺伝するもの西南の諸藩と抗衡するに急に於て、徳川氏が朝敵の名を被むるを憤り一死之を雪ぐを以て君家に報るの臣節と為し、勝敗を天に委せんと欲する者あり。仏国の声援を藉るも亦辞せざらんとする者なきに非らざりき。仏人若し力を東方に借さば、英人豈助を西方に与えざるなきを保たんや。此の如くなれば、我大日本帝国の運命果して如何なりしぞ。今日より當時を追想して、悸栗せざる事能はざるなり。唯大勢に通ずるの明あ

り、時機に処するの智あり、又人を感ずるの誠ある者能く此危運を転回するの大任に當るべし。嗚呼海舟先生此間に立ちて不朽の業を成せり。予輩が明治の巨人、歴史的人物として敬重する所以の者此事実あるによるなり。 II - 99

○凡席上の練習熟すと雖も、危険に遭遇する景況十度は十度の変あり、一様ならず。何ぞ口頭の能く伝ふる所ならむや。一度生命の際に逢はゞ、其苦境を以て心中に自得するあらん。是を以て変化の術も亦た自然に生ずべし、解せる哉と。余是を聞て学問と實際の区別を覚了し深く其教示に感服し、又万般の事活用の妙微に及ては口頭にあらざるを省悟す。 II - 100

○合する時は主義を以てし、其の分離するや主義を以てせず。人事変遷反覆無常此の如く感情の上に働く。人事の作用を解して十分に立働く能はざりしは諸君に対して深謝する所なり。然も予は今にして反覆無常の条理が人間を支配するの事実を発見し大なる経験を得たり。 II - 101

○日本国民の顔色を外国人の面前に相對せしむて、毫も耻づる所なからしむるの一事なり。我輩の顔色云々とは敢て黄白人種の別を云ふに非らず。苟も日本国民とあらんには、男女老少を問はず、文明人と比較して異様の色を放たしめざる事肝要にして、例へば食物衣服の如きも次第に他に近みて、遂に同化の目的を達す可きは無論なる、其飲食衣服等有形の物は其形を變ずること容易なれ共、我輩の爰に大に掛念に堪えざるは日本男子の品行なり。下等の無知輩は全く別とし、凡そ今の社会の男子にして品行の一段に至り、外国人の面前に対して苟めにも赤面せざるものありや否や。我輩の敢て問はんと欲する所なり。〔かりそ〕 II - 102

○日本の婦人は実に此世に生きて生甲斐なき者なり。氣の毒なる者なり。憐む可きものなり。米國婦人は片時も斯る境遇に安んずるを得ず、死を決しても争はざるを得ず。否日本、國を殊にするも女性は則同胞姉妹なり。吾々は日本姉妹の爲めに此怪事を打破して惡魔退治の法を謀る可しとて切齒慷慨涙を払て語りたることあり。 II - 103

○金幣、婦女、官職等を餌にして来る勧誘、誑惑を却て又警官、探偵、兵士等政府の公權を濫用して迫る、威圧、脅嚇、危険等に抗し、終始一定の説を抱ゐて動かず、堅節を守りて主義を貫きたる人物の言行を伝じて悲憤、欽慕、具さに慷慨の情を極むるあり。亦た金の爲に酒の爲に其身体其精神を売る者世にあり。是れ正直自尊の心なきなり。即ち男らしき分別なきものなり。

II - 104

○人の高寿に隣るものは、必ずやその人の挙動、性質、體質、境遇、嗜好、住居等の何れかに然るべき特徴あるに相違なしとす。

II - 105

○ムシュー・ド・スタールは実に眞実の人物也。正直の人也。最も円満なる紳士也。彼と政見を異にし、主義を異にし、政治的仇敵の位地に在る人と雖も、一度び彼と会見すれば春風駘蕩其温情に醸せられて百年の怨恨も忽ちに霧消し去るの感あらしむ。一千八百八十四年以来駐英露国大使として倫敦に在り、其間英露衝突の起りたりしこと一再ならず。而も英国人誰一人として彼に向て攻撃非難の鋒翳したる者はあらざる也。英国の内閣は其間三度交迭して「グラッドストーン」内閣となり「ローズベリ」内閣となり「ソルズベリ」内閣となれり。而もスタールは常に眞実なる親友として厚遇せられたりし也。又以て彼の人物の如何に敬重す可きかを知らずや。

スタールは一千八百六十一年コンスタンチノブル大使館の一書記官に挙げられたり。當時の大使イグナチフ不在の時は、常に代理公使として欧州最難のコンスタンチノブル外交場裡に畏敬せられつゝありき。イグナチフとスタールと其性情より云えば全然反対の人なり。彼は峻峻にして矯々たる才士なり。之は温和にして醇々たる篤実家なり。而も二人の交情は漆膠の如く^[著]当て相背離する事無かりしなり。

II - 106

○それ教育の要は品性の陶冶にあり。上に師あり、下に友あり。外は講習を事とし、内は警省を旨とし、而して始めて一個の男兒として世に立つことを得るなり。然るに今や師友の道殆んど地を払ひ、誠意誠心の工夫唾棄して顧みる

ものなく、進んで名節を砥礪することなく、退いて苦学自修するものなく、唯だ繋がる舟の如く、轡なき馬の如く、放恣驕情徒らに青年の時間を空過して壯夫となるを待つのみ。

II - 107

○蓋し快楽の原則は今日の快楽をして、明日の不幸の因たらしむる勿れと云ふに外ならず。

II - 108

○大人にして赤子の心を失はざるは天真爛漫の美を全ふする所以なり。一点の修飾なく、半点の矯術なく、活潑なる心性の自由なる運行為すは、如何にも人類の真趣を發揮する手段の一たるに外ならざる可し。

II - 109

○吾人は実に此説の中に幾多の真理を含蓄する事を見る。吾人は自然崇拜説の道德問題として、美術問題として、文学問題として良好なる感化を社会に与えつつあるを信ず。然りと雖も、吾人は一步を推開して孝慮せざる可らざるものあり。所謂の天真爛漫の名の下に如何に自墮落の事は行はれたるよ。如何に人生の修養練磨は軽忽に附せられたるよ。如何に意志は薄弱となり、情火は旺盛となり、為めに情ありて意なき不具の人間は出で来りたるよ。若し唯だ飲を欲すれば飲み、眠を欲すれば眠り、之を以て我事了るとせば人間は禽獸と何の択ぶ所ある。而して此の如き禽行獸為は天真爛漫の看板を被りて社会より寛假せられつつあるぞ奇怪なれ。

II - 110

○内自から主とする所あり、外は能く世界の同情を我に傾倒せしむ。国際政策の妙は固より此に存し候。外を忘るゝ不可也。外に偏して内を忘るゝ亦た最も不可なり。

II - 111

○嗚呼、進歩党は非地租案を提げ、以て地主を囊中に括らんとして失望し、今日其言質を取消さんとして徘徊せり。政友会は商工を味方に取らんとして、今日意外の不振に一驚し、汲々其振作に勞苦せり。其方針相異なりと雖も其遺算は相同じ。予輩前篇に於て進歩党失計の理由を説けり。政友会失計の由来を此に述ざる可からず。曰く、伊侯の言行相反して自信なく誠実なきを以てなり。侯の宣言は主として政党矯弊に在りて他の経綸を見出さず。若し矯弊の實なくんば是れ理想なく目的なくんば政友会烏有たらん。而して政友会は此弊害の癡癡たる自由党を基礎とし、弊害の

權化たる星、林を創立者とす。⁽¹²⁾嗚呼是何の戲劇ぞや。雨宮敬次郎・浜野茂輩を中樞として、商界の弊害を矯救せんと

呼号する者在りとせよ。天下の正実なる実業家何ぞ此旗下に集まらんや。是れ世の商工党の政友会に來らずして伊侯の予期を空くせし所以なり。嗚呼地主を得んとして進歩党失望し、商工を得んとして政友会失望す。其由來を尋ぬるに飾言權謀以て天下を動かさんとする。初一念の過失に發するものなり。山鹿素行曰、誠を以てするも人を動かすは難し、誠を以てせずして人を動かさんとする、其愚や測り知るべからずと。素行は孟軻の言を一層深く解釈せる者なり。予輩新旧二党の人々に告ぐ、既往は追ふべからず、願くは其本に還り、自信誠精を發揮して斯民に臨まん事を。

又我國民に告ぐ、真実に語る時に其政党を助けよ。詭言巧辭以て斯民を翻弄する者は、國家に忠実なる政客に非るなり。諸氏願くは隻眼を開きて政党の举措を鑑み、徐ろに其進退を決し、以て國家の進運を裨けん事を。

○卓拔なる才能と、不撓の精力と、抜くべからざる愛國心とを有して、自己の良心より發揮せる鼓舞に依て國民を作興し、打ち勝つ能はざる國難に打ち勝ち、最も偉大にして最も価値ある効績を其國に寄与したり。

○元老自ら其に翻弄せられ腐敗汚濁を共にして天下の攢斥する所となる。嗚呼是所謂元老者流の不明不知、怯懦憶病自ら取るの禍に過ぎず。抑亦た誰を尤めんや。真個の原因は政界に是非正邪の觀念消滅して利害得喪の比較万事の標準となりたるに在り。

○吾人は伊藤侯の苦心を諒とするものなり。此の内外多事に際し未だ訓練せざる兵を率いて以て政界の戦場に立たんとす。されば伊藤侯と志を同ふするの士は斯る場合には成る可く公共的精神を發揮し、私を捨て公に殉ずるの覚悟緊要に候。獮官杯の沙汰は耳にするさえ五月蟬く候。況んや其運動をや。記者は政友会の領袖諸氏が能く一致協和して其素志を貫徹せんを祈る。

○今日の事ある、畢竟予が為し能はざる事を為し得べしと思ひ、恃む可からざる人を持ち得べしと信じたる不明の罪

たるべし。

II 116

○子の決心は尋常に非らざる事は推察するに難からず。乍去何が故に同子をして斯の如き決心をなさしめたるか、其理由に至りては伊藤侯を始め政友会の領袖等も毫も知る所なく単に意外の感に打たれ居る計りなりと云ふ。

II 117

○吾人は高踏勇退なるものを絶対的に否認するものにあらず。苟も去らざる可らざるに去る、是れ人生の通義のみ。力若し矯正す可くんば之を矯正すべし。若し能はずんば決然として去る可きのみ。既に進んで匡す能はず、亦た身を抽んで退く能はず。徒らに糢稜糊塗是れ事とす、是れ決して出処の節を全ふす所以にあらず。

然りと雖も、人事は概して庖刀にて豆腐を切るが如く快活に行はる可きにあらず。今日行はれずして明日行はる可き事あり。充分行はれざるも、或る部分迄は行はるゝ事あり。多くの問題は時間と程度との問題たり。詳に謂へば、苟も其人にして辛抱強く根気強く鉄肝石腸を以て其事に当らば、悉く意の如くならざる迄も亦た悉く意の如くならざるにあらざる可し。此間の消息は所謂高踏勇退連中の夢想する能はざる所たらざんばあらず。

南宋の江南に偏安するや、所謂主戦論者の中に於て果して其議論の実行に努力したるもの幾人ありし乎。故澹庵の秦檜斬る可しの上書洵に痛快なるも、国家の経綸に於て果して幾何の裨補する所ありしぞ。記者は秦檜に対して同情を表するの意なしと雖も、彼が所謂諸君は争ふて大名を取り以て去る、檜が如きは但だ国家の事を了せんと欲するのみとの言に対しては聊か首肯する所なき能はず。如何に侃々諤々の議論をなしても、議論の為に放しのみにては国家も頗る迷惑せざるを得ず。仮令彼等は正人とか君子とか清士とか硬漢とか有らん限りの名誉の称号を担ふて去る可きも、吾人は此れが為め国家の羸る所は、虚名の豪傑、紙上の君子の外多きを見出す能はざるを憾む。

若し、吾人をして直言するを許さしめば、多くの場合に於て所謂高踏勇退なるものは臆病者の遁辞にあられざれば、

無責任者、不能力者若しくは横着者の隠家たるに過ぎずと言ふを遲疑せず。其の有心にして然ると、無心にして然るとは暫らく分析するを要せず。兎も角も責任を他に嫁して自ら全きを求むるの陋体^{ろうたい}に到りては更らに指摘するまでもなき也。

不幸にも胡澹庵的の流風は我が国民の思想及び氣習を支配し、殆んど牢として抜く可らざるの勢力を見る故に、一の会社を創むれば、乍ち幾多の胡澹庵出で来り、一の政党を組み立れば、亦た乍ち幾多の胡澹庵出で来る。それ竹林に筍を見、松山に松簾を出す、固より不思議にあらず。言に鋭にして行に鈍に、破壊に長じて建設に短に、癩癩と勇氣の差別なく、無責任と正直とを混同する社会に於ては、滔々たる天下随処に小胡澹庵、若しくは擬胡澹庵、或ひは偽胡澹庵を見出すは寧ろ当然の現象とせざる可らず。然も是れ決して国家の慶事にあらず。何となれば国家の経綸に於ては所謂高踏勇退の正人、君子は殆んど一毛の価値だもあらざるなり。彼等既に然り。況んや彼等に随喜する雷同者流に於てをや。

人の氣品に於ては、瀟洒とか磊落とか宛転滑脱とか称する特点是決して輕視す可きにあらず。されど、事を成就するは執着にあり、堅忍にあり。撓めて折れず、屈して能く伸ぶ的の性格に存する事を忘る可らず。湯治場の交遊や喫茶会の話相手には前者或は可ならん。されど一事を成さんとするには後者ならざれば能はず。惡名は己れに同じからざる者に被らしむる懲罰なり。彼の奸才とか俗物とか小人とか貶称せらるゝ古今幾多の人は焉んぞ最も責任を重んじ、義務を感じ、前後を達観し、始終を一貫し、遂ひに其の目的を成就したる眞骨頭漢なるなきを知らんや。吾人は敢て秦檜に味方して胡澹庵を敵とするにあらず。然も古今の歴史を読むにも当今の人物を品評するにも吾人は須らく先づ世間通用の文句のみに雷同す可らざる因由の存するを詳らかにせざる可らざるの必要を見る也。

○政友会の近状も先づ無事也。無事はよけれども創業の元氣を沮敗するは可なり。実は反対党が甚だ微力なるが故

に政友会も亦た聊か振はざるの状あり。一言すれば。進歩党は余りに弱きが爲めに墮落し、政友会は余りに強きが故に腐敗せんとしつゝあり。是れ宜しく警醒せざる可からざる所にあらずや。況んや政友会の如きは単に各要素の群集したる迄にして未だ組織を見ざるに於てをや。其の猛省を催告するもの也。

II - 119

○大日本の人民が人生唯一の光榮は唯官吏たるに在りと信じたる時、冠冕以外爵、祿以外勲、位階級以外自から榮地あることを教えたり。世人が彼を以て其祖師なるが如く信ずる拜金宗も彼に在りては正直なる労働と醇粹なる独立とを具體的に現したるものとしての金銭を尊ぶには過ぎざりき。彼は日本の人民に天地の間に頼むべきものは唯自己の手腕と此手腕を客觀的に表はしたる黄金のみなることを教えたり。是れ実に第十九世紀の日本が必ず學ばざるを得ざる教訓なりき。是れ実に時代の必要が促したる最も切実なる問題なりき。彼は金銭の正当なる価値と正当なる使用とを金銭の誤解と誤用とに充ちたる日本人に教えたるが爲に、金銭を尊神とする「マンニズム」の信者なるが如くに罵られたり。然れども彼は世人の誤解を恐るゝものに非ざりき。「独立自尊」

II - 120

○若し其人品を論ずれば、彼は頗る狹隘にして頗る遲鈍なりき。彼は固より海天空闊の量ありと云ふを得ず。清濁併せ呑むの胆ありと云ふを得ず。眼、靈、手、快、臨、機、応、変、の略ありと云ふを得ず。直指人心直に事と機とを洞破する天才ありと云ふを得ず。彼は大なる学究なり。彼は大なる偏人なり。之を古人に比すれば、其性情大だ新井白石、佐久間象山と似たり。彼は到底傍觀者なり。批評家なり。郷先生なり。野人なり。廟堂の器に非ざるなり。唯夫れ野人の資なり。而して野人の位に居る、是れ白石象山の成功少くして彼れの成功多かりし所以なり。天の才を生ずる、区にして別なり。唯其所を得るに在るのみ。余は彼が自己の分を知り、自己の領域を解し、最も善く自己の特長を発揮したる自知の明に敬服するのみ。

II - 121

○それ道德の本体は生人原始以来固より変ぜざるべし。されど戦国の道德は君主の馬前に討死するを以て最第一と為

し、商業立国の道德は契約を厳守し、信用を重ずるを以て其特殊なる標準と爲す。此の如く国民的道德の教養時代の要求如何によりて其軽重する所異ならざるを得ず。是れ吾人が世の教育家に向て時代の要求を観察し、之に順応せんことを希望する所以なり。而して其理由によりて協同一致の教養に向て、特に重きを措かんことを観説する所以なり。

II - 122

○白耳義国アルベルト親王は人間義務の一つは間断なく学に志すべきを能く知られたれば卓絶せる人士の交際新規特別の知識を得る本源たるべきを忘れず屢々之れと往来せられたり。

II - 123

○国の盛衰に關しては自ら万古不滅の道理あり。即ち国粹にして能く他国の文明を同化するものは起り、之に反するものは衰ふ。之に次で必要なるは競争心なり。苟も国際間に立つ以上は勢い他国の圧力を受けざる可らず。之に對して愛国心より競争の感慨を起し以て、一國の進歩を促がす。而して国粹は競争心と相聯結して常に皇室なる中心に倚りて文学、美術、宗教、政治等有らゆるものゝ發達を致すものなりと論じて夫より歴史談に移り、我邦は中古儒教を輸入して一時は公私共に漢文を用ゆるに至りしも、特有の仮名を交ぜ、即ち彼を同化して遂に今日の文章を爲し、仏教も又神道に依りて同化せられたり。近く維新の大業は外國の刺激に原因せしものなれども、其圧力に對する競争心は所謂攘夷となり、更に国力一致の必要よりして皇室の下に勤王論を唱ふるに至り、之に打勝つには彼の文明を同化するの必要あるより、洋学を学び、文物制度を採用し、更に物質的の進歩となりて遂に今日の文明を致せり。歴史は此千古相關聯する事實を示すものにして、維新の事情を明にするも遠く其以前に遡りて觀察するの必要あり。野史台が今回拡張して図書館設立の計画あるは大に賛成する処なり。

II - 124

○一夫一婦は人間の常道にして文明世界の通義なれば、此常道を履み外づして敢て通義に戻るものゝ決して安樂なる家庭を営み幸福の生涯を送るを得ざるは疑ひなき所にして、之が爲めに種々悲惨の事件を引起したるものは古来、其

に乏しからず。

II - 125

○大人英雄なるもの鬼神をも欺くの氣胆ありて尚ほ自個の欠点を自覺し。偶々他人の指摘するものあれば、男らしく之を承認するを辭せざる所以のものは何ぞ。彼等が自ら益を求め、自ら大なると欲するの心は眼前の虚栄心、浮誇心、高慢心に打ち勝てば也。

II - 126

○若し総ての人が其の間違を間違とし其の過失を過失とせば社会の大氣は更らに清浄なる可く、人事は流水の如く更らに凝滞す可き所なかる可し。唯だ負け吝み根性の充滿するが為に、人各々其の非を知りつゝ強ひて之を遂げんと欲し、人各々其の過を寛りつゝ從て此れが辭柄を作り、此れを文らんと欲し、此に於てか人事糾紛徒らに無用の用に趁はれ、自から底止する所なきに到る也。

II - 127

○鉄血宰相の恋の文

生は政界馳驅の多忙なる生活を選び、苦悶絶ゆる事なき功名心を捨て、愛する君と共に退て靜かなる田舎に住み、祖先伝来の采邑に豊なる田園生活の幸福を樂まんと思ひし事幾度なるを知らず。然れども近頃大に感ずる所あり。此心頓に消えて、今は又た人間活動の社会に吾が手腕を試みんと欲するの念勃々難禁候。

政府の役人等は、一千ターレル内外の給料にて妻子と共に都会に住み、華美なる生活致し居候。彼等は現金にて家賃を払はざるべからず。燃料、燈火器具、衣服、食物を買はざるべからず。僕婢車馬の為に払はざるべからざれども、君等は此等の事には全く心配なく、祖先の恩沢により豊かに暮す事を得べく候。然れど生は生活の快樂のみを目的とする能はず。君も又た然り。吾等は活動せざるべからず。何の処に吾が手腕を試みんか、是れ頃來生の腦中を支配する疑問に候。

前途茫々識るべからず。人世の變転期すべからず。富貴は貧賤と化し快樂去て悲哀残り、吾等が樂しまんと望む所は

夢の如く消へて如何なる困厄の境遇に陥るか予知致し難く候。如何に艱難を嘗むるとも、吾等二人相結んで解けず、神の心に万事を任せば、吾等は満足して人世に処するを得べしと存じ候。樂しき時にも悲しき時にも光榮身を飾る時にも恥辱名を汚す時にも相愛変らずんば貧と富とは心に介するに足らず候。

II - 128

○社交の秘訣

社交の秘訣は一言以て是を蔽えば、虚心坦懷、浮世の万事に应酬し万人と交際し、其举止言語自から閑雅にして毫末も喧鬧の風なく、綽々として余裕あるにあり。斯く云へば甚だ容易の事の如くなれども複雑なる社会に処し万変に應じて、心緒悠然として乱れざるは到底不可能の事にして、所謂高德達識の人にあらざれば能はず。されば只に外面に表はれたる言語動作の巧妙なるを以て社交の秘訣に通ぜるものとは謂ふこと能はず。其奥意は専ら心意の訓練修養に存し、完全なる常識機敏なる才智明晰なる判断内部に養成せられて、行ひ自から外に顯はれ、高尚なる品格、便侖の態度、閑雅なる举止となる。然れども是を實行せんとせば、中々に困難にして容易に妙機に通ずる能はず。されば細目に別ちて社交の秘訣を研究せん。

II - 129

○親王の日課

親王の日課は、不時の事件ある外は左の如く厳密に定められたり。

午前六時半起床、八時半迄勤學せられり。次に其室を出で家族と共に朝飯せられ、若し天氣好晴なれば、九時より十一時又は十一時半迄乗馬をなす。夫れより再び勉學に掛り各処の通信を認められ、若し乗馬にて外出せられざれば「グルナジェ」聯隊と共に練習に従事し、或ひは兵營に至りて所要を便ぜらるることあり。

而して正午十二時半家族と午餐し、一時過ぎより皇室の高官と徒歩運動をなし、時としては三時半に至れり。夫れより軍事の問題を研究せられ、四時に其副官を引見せられ親王は公書に署名せられ、其終るや専ら特種の事務を所弁せ

らる。何となれば親王は既に前記する如く社会の秩序、政治、経済又は工事の諸問題に与つかねばなり。

親王は好んで多くの書籍を読み、既に英国、独逸国、仏国及米国の重なる雑誌は尽く購入せられ英国大日刊のものは総て閲読せられる。

午后七時に至り常に家族と晚餐を為され、八時に至る。夏期天気晴朗なれば一時間外出せられ、冬期は劇場にも趣かれ、又親王の最も嗜好せらるゝ「モンネー」大劇場に至らるゝも、決して終りまで坐せらるゝことなし。常に十時頃には宮中に戻られ、一時間白耳義国の各新聞紙を閲読し、十一時寝に就かる。

斯くの如きは親王昨日迄の日課たり。恐らく明日於ても変ずる事なかるべし。

II - 130

○其の心は、天地の美に感じ物の憐れを知り、胸中恒に快活なる高雅なる趣味湧き、醜を醜とし美を美とし家に金銀宝玉なきも何となく殺風景ならず、逍遙自適生活の修羅道に立つて、尚ほ自ら慰樂するの余裕あり。

II - 131

○敢て問ふ、人世厭ふ可きか、將た愛す可きか。入ては窮屈なる家屋の裡に起臥し出でゝは匆忙たる名利の間に奔走し得ては喜び喪ふては驚き、心波情海湧として、片時も休む暇なく五十の人生夢の如く過ぎて、忽焉として北邙一片の煙となる。嗚呼夫れ此くの如く果敢なきものなるか。嗚呼夫れ此くの如く厭ふべきものなるか。

II - 132

○施政の要は実績の如何に在り。実績にして華らんには天下の耳目は必ず之を認めて自から同情を表す可し。無言却て多言に勝るの場合あり。我輩は現当局者が寧ろ辞を少なくして只事の実を勉めんことを望むものなれども、其寡言勉強の中にも最も謹しむ可きは、小策を弄ばず奇功を貪らずして誠心実意その挙動を公明にするの一事なり。

○勤儉力行は国を成すの上に於て又一家をなすの上に於て、肝に刻ぎみて忘るべからざるの道なり。

II - 133

○既に自己あれば自己を主とする觀念を根本的に排除す可らざるや論なし。然も之を節制し之を裁正し、自己の利害

II - 134

と与に其の周旋し、触着する、周囲の利害をも亦た顧慮するを要す。西人嘗て紳士の義を解して曰く、紳士とは他人の便宜と都合とに注意して自己の便宜と都合とを慮かるに違まあらざる人を云ふと。

II - 135

○如何に芸能の秀でたるも如何に才情の美はしきも、如何に手練あり愛嬌あるも、若し其の人に於て意志の堅確を欠かば、屬子に要なきが如く、舟に舵なきが如く、人生の行路に於て遂ひに失敗せずんばあらず。

人は堅確なる意志によりて始めて真正の自由を享受するを得る也。意志一たび定まらば、境遇も我を移す能はず、感情も我を動かす能はず、利益も恐怖も我に向て其の勢力を逞ふする能はず。此に於て我は始めて真我を保全するを得る也。吾人は多くの物を失ふことある可し。然も意志を失ふことある可らず。一の意志は殆んど總ての物にも代え難き也。切言すれば意志即ち人也。

II - 136

○軟弱なる性情は自然に親切多情單純優美にして、自制の力なく、感情の動くが儘に弄ばれ、一生漂々として過ぐるものにて愛嬌なきにあらず。秩序完備せる社会に於て都合よき誘惑なき境遇にある間は斯かる性情は最も美はしき品性たるを得る事あるべしと雖も、之を失敗せしむべき弱点は絶えず伴隨して絶えず増長す。軟弱の性情は剛毅堅忍を欠き、主義に固着するの力を有せざるが故に、一度び躓けば回復するの精力なく九転十起の元氣なく、不幸なる不道德なる悲劇を演じて終るの例少からず。強健なる意志を有するものは一見美はしからざるの觀ありと雖も、困難に遭ふて容易く之を排するを得るが故に、軟弱なるものゝ如く憐むべき、悲むべき不道德に陥る事少し。

II - 137

○人は善惡の差別に對する強き意識を其礎とし、主義名譽の堅固なる地盤の上に立てる。自制的意志を有するにあらずんば、一生を通じて其の徳操を安全に持続する事能はず。

II - 138

○吾人は動もすれば意志存養の大修煉場をば無心に経過し、此の絶好の機会を空しくすることあり。古人曰く、世路風霜吾人鍊心之境也。世情冷淡吾人忍性之地也。世事顛倒吾人修行之資也。

慶長二年八月十五日於全羅道南原表大明国軍兵数千騎被討捕之内至当手前四百二十人伐果畢

同十月朔日於慶尚道泗川表大明人八万余兵擊亡畢

為高麗国在陣之間敵味方閑死軍兵皆令入仏道也

右於度々戰場味方士卒当弓箭刀杖被討者五千余人海陸之間

横死病死之輩具難記矣薩州島津兵庫頭藤原朝臣義弘

慶長第四己亥年六月上辭 同子息少將忠恒建之

○色と酒と名と利

○外美内醜

○浮世は廻る小車のあいた定めぬ習ひなりとは申すものゝ、義和団勃起の当日と今日の清国との差異果して幾千ぞ。
想えば地球の転環も無理ならぬぞかし。

○学問の第一歩は申す迄もなく己を知るにあり。己を知るとは己れの不足を知るなり。己れの不足を知るが故に、猛然として益を讀ひ、教を求め、且つ探り、且つ釈ね、自ら休する所以を知らざるに到るなり。

○苟も世を経し民を済ふに於て自から一日の長ありとせば、其の長を挙げて、世道人心の為めに献ぐるは固より志士の本分也。吾人の生活は自個の安心と是認との為めなれども、安心と是認とは唯自個の有する総てを人類の為めに投じて始めて得らる可れば也。

○其の賞賜を辱くする当局者は、其の栄寵に誇らず、其の隆恩に忝れず、更らに謙抑勵精、以て偏えに報効の誠を尽。

○武士なるものは当時此の如く、社会より尊敬を受けたるものなれども、武士たるの道に背き恥づべき礼節を失した

II 145

II 144

II 143

II 142

II 141

II 140

II 139

る時には非常なる恥辱を以て社会外に放逐せらるゝなり。

II 146

○凡そ社会をして精神的萎縮病に罹らしむるものは、尊敬の念地を払ふより甚だしきはなし。人は人と交はり人と遊び人と働き人と楽しむ。即ち人は人によりて立ち人と共に在り。人若し人に対して尊敬の念を絶たば、人は実に魚の水を離れ鳥の空気を離れたること同様の境遇に陥りたるものと謂ふ可し。尊敬の念は実に人をして男らしき精神を発揮せしむるの動機にして所謂大丈夫の心事は実に此にあり。然るに若し人より此の動機を取り去らば人は如何に浅間敷きものとなる可きぞ。

II 147

○篤と此の時態を諒解し此の大勢の要求に応ずる人物の養成を助められ度く希望するのである。

II 148

○調和とは総ての学科相互の調和である。体育、知育、徳育の調和である。而して最も記憶すべきは教育と時勢との調和である。

II 149

○人を善良に徳義ならしむるには三個の要素がある。第一が自然で第二が習慣、第三が道理である。

II 150

○扱て其の進歩の原因に就ては種々の見解がある。その中にて最も適中したりと思はるゝものは左の如くである。曰く、独逸人は科学的知識を応用する事、即ち此れが前に申したる活用である。曰く、独逸人は他国の長所を認め之を採用するに遲疑せざる事、即ち此れが前に申したる膨脹性の働きである。それから独逸人は何事も等閑に放擲せず徹頭徹底飽く迄やり遂ぐる事、即ち此れが責任を重んずるの意味である。否なそのみならず骨を惜まず、面倒を厭はず、研究的精神を以てどしどし難題を排除して行くことをも含蓄して居るのである。

II 151

○市民は活動的人でなければならぬ、自信自持の人でなければならぬ、併し又た静かに寛裕に勇敢なる人でなければならぬ、併し温厚に平和を愛し決して故なくして戦はざる蕩逸腐敗を憎む人でなければならぬ、併し又た芸術に於ても人事に於ても高尚なるものを識認賞美する人でなければならぬと。予は殆んど此の上に蛇足を添ゆるの必

要はなしと思ふのである。

II - 152

○帝国の運命は実に諸君の手に繋がりて居るのである。さらば諸君は須らく時務を洞察し、決して詭激偏狭迂僻頑冥輕噪淺薄怠惰放逸の国民を出すの媒介となることなく、飽迄二十世紀の天地に雄飛する堅実勇敢活潑活動膨脹進取責任を重んじ職分を守り国家の需用に応ずるの国民を養成せんことを祈るのである。

II - 153

○惟ふに人生の成功とは人性の生活の意義を最も円満に達したるを意味す。生活の意義とは吾人の能力を最も完全に發達せしめ最も有効に人類の爲めに使用するを謂ふ。

II - 154

○自信自導 ○自主自立 ○自立自営 ○独立自尊

II - 155

○勤勉と節儉及び収得と貯蓄との權衡を失せざる事を要す。

II - 156

○本邦或る種の言語 陷害せんと目論 第一着の羅織沙汰 非違を廬羅剝扶

II - 157

○元來人に元氣なかる可からずとは人生に於ける確定の教訓にして誰も之を否むものなきなり。然も其の元氣は古子の所謂の浩然⁽¹⁴⁾の氣にして、決して世俗の所謂乗氣若くは当氣にあらず。乗氣とは多くは決心の場合に出で来るものにして興に乗じて自から裁するを知らざるを謂ひ、当氣とは相手に当附け若しくは見せしめの氣味にて心ならずも馳騁するものにして多くは不得意の場合に出で来るが如し。若し或は相手なきも自から為さんと欲する所を為す能はざるが故に、恰も驕兒が玩具を擲つが如き行動を為すもの之を称して燒氣と謂ふ可きか。而して力疲れ神倦み氣息奄々といて其初心を抛つ者豈に惰氣なるものに非ずや。以上の乗氣、当氣、燒氣、惰氣は要するに皆な短氣の作用の或る一面に就て名を下したるものにして、悉く短氣の二字中に概括し得べしと信ず。若し夫れ然る可らずと云ふ人あらんも、吾人の所謂短氣とは如上の意義なることを諒知するに於ては更らに差支なかる可し。

惟ふに人間の心理的動作は学者の解説の如く秩序整然たるものにあらず。事後より之を弁釈すれば種々の意見も出で

来る可しと雖も、其の卒然俄然の際に心猿意馬の奔躍するに当りては我自から我が何事を為せしやを知らざるものあり。而して其の之れに至らしめたる動機の様如きも錯綜交々決して單純なる能はず。然も概言すれば孰れも短氣の二字を離るゝ能はざるが如し。而して短氣は、實に人生の大敵と知らずや。短氣は實に無責任也。他に対して無責任なるのみならず、自個に対して責任を忘却する場合は即ち精神上に於て自個の人格消滅したる日なり。

II - 158

○元來富貴の子弟なるものは生れながら他人の尊敬若しくは追従を享く可きものとして産出したるものなれば、人事は悉く我が意の如くなるものと思ひ、世人は悉く我に趨走するものと心得、知らず覺へず一種の主我的若しくは利己の根性を養生するを禁ずる能はず。されば彼等は大氣ならざる可らざる筈なるに却て狹隘に、他人の思ひやり広く且つ深からざる可らざる筈に却て身勝手に、公共心、愛國心は最も彼等に於て多量なる可き筈なるに其実は却て棄にしたくもなき程なるぞ口惜しけれ。

且つ彼等に衣食の圧迫なきは非常なる仕合せなるが如くして其実は非常なる不幸なり。そは衣食の憂なきが故に額に汗するの必要も感ぜず、將來に向つて準備するの遠慮もなく、唯だ其日をぶら／＼として暮らしさえすれば吾事了ると為す也。されば彼等は殆んど先天的に遊惰の民たる資格を具備し来りたりと云ふも必らずしも過重の誣言にあらず。

II - 159

○富貴にも移らず威武にも屈せず榮辱にも驚かざるは畢竟内部の生活に於て自ら安著する所あるが為めにあらずや。

II - 160

○蜚語流言。

II - 161

○不憂不懼斯謂之君子矣乎。内省不疚何憂何懼。

II - 162

○志は必らず高く且大なるべし。克己し勤勉し忍耐し執着し精力を集中して之を成すに力むること國も亦人と異なる

可からず。其高大なる志望を以て上下一致奮励事に当りて果さずんば則ち止まざる、是れ之を興國の意氣とは謂ふ。

II - 163

○夫れ人生れながらにして知るものにあらず。必ず学んで後に之を知る。生意に於ける、亦然り。必ず童にして之を習ひ難苦を知り経紀を覚え、歲月を積みて而して後ち智識を啓発し是非を弁別するに至る。然れども生意即ち商業の師を経て授くべきものは只是れ其門に引入るゝに過ぎざるのみ。諸般の点綴変化布置施為等は却て自ら省み自ら悟り自ら揣り自ら摩するを要す。即ち商業は総ての事情に精通すれば其の多き程愈々高く斯くして類を出で萃を抜かば方に商業上の領袖たるべし。

II - 164

○凡そ富を求むれば仁ならず、仁を為せば富まず。古來人事の常態にして円満の功名は世間の容易に許さざる所なりと知るべし。

II - 165

○教育の終局目的は個人として又国民として其人格を発達せしむるにありと雖ども、其の直接目的は個人として又国民として現下の生存競争に適應すべき性格を具備せしむるに在り。此の生存競争に資せざる教育は無用の教育なり。此の生存競争に益せざる学問は有害の学問なり。故に教育に従事するものは先づ其社会の必要を知り其の社会を圍繞する四辺の状勢を察し個人としては其社会的境遇に適合し又国民として其の世界的境遇に順応すべき特性を養成せんことを努めざる可からず。

II - 166

○食欲の羈束を逃れて飢餓の梟を得べく、後に勞苦心配恐懼悲哀疾病より次第に遠かるに至るべし。

II - 167

○我が教は徳を以て徳に報ゆるの道也。天地の徳より君の徳、親の徳、祖先の徳、其の蒙る所人々皆な广大也。之れに報ゆるに我が徳行を以てすると云ふ。君恩には忠、親恩には孝の類、之を徳行と云ふ。

汝輩能く／＼思考せよ、恩を受けて報ひざること多かるべし。徳を受けて報ぜざる事少からざるべし。徳を報ゆる事

を知らざるものは、後來の榮えの、みを願ひて、本を捨つるが故に、自然に幸福を失ふ。能く徳を報ゆるものは、後來の榮えの後にして、前の丹精を思ふが故に、自然幸福を受けて、富貴其の身を離れず。

夫れ孝は親恩に報ゆるの道なり。弟は兄の恩に報ゆる勤也。凡て世の中は恩の報いずばあるべからざる道理を能く弁

知すれば、万事心の儘なるもの也。借りたるものには、利を添えて返して、礼を言ひ、世話になつた人には、能く謝儀をなし、買物の代をば速に払ひ、日雇賃をば日々払ひ、総て恩を受けたる事を能く考えて、能く報ゆる時は、世界のものは、実に我物の如く、何事も欲する通り思ふ通りになる。此に至りて、神明に通じ、四海に光り、西より東より、南より北より思ふところ服せざる事なしとなる也。然るに或歌に「三度たく飯さへこはしやはらかし思ふまゝにならぬ世の中」と云へり。甚だ違へり。是れ勤むる事を知らず、働くこともせず、人の飯を貰ふて食ふものなどの詠めるなるべし。夫れ此の世の中は前にも言える如く、恩に報ゆることを厚く心得れば、何事も思ふまゝになるもの也。然るを思ふまゝにならぬと云ふは、代を払はずして品を求め、時かずして米を取らんと欲すれば也。

○吉書

一、神社仏寺修理興行之事

一、可專勸農之事

一、可徵納国々之年貢之事

右任三ヶ条之旨可有沙汰之状如件

永禄貳年正月十一日

貴久書判

○年寄連中には、適當な尊敬を払ひ、中年の人には、彼等の朋友として、精靈の指導者として、品位を含んだ親切心を以て、相當の挨拶を忘れず、又少年に対しては、威厳と慈愛との様子を見せ、更に幼年者に向つては、優しげに其頭を両手でなで、や

った。尤も此等の心遣ひは日頃からの習慣である。

○所謂世界政策なるものは十九世紀中葉以降に於ける世界の現象にして、今日の国民的国家を一転して歴史的範圍を脱し世界的国家たらしめんとするに在り。吾人は敢て世界征服的国家と言はず。要は唯立国の基礎を世界の上に求むるに在るのみ。独逸に之を世界政策と云ひ、英米に之を帝國主義と云ひ、露西亜に之を大陸的世界政策と云ふ。其名異にして其実は則一なり。其形式よりして之を言へば狭義に於ては殖民政策なり。広義に於ては勢力範圍政策なり。經濟上に於ては保護政策を以て貿易の利益を保障し、政治上に在ては軍備別して海上權に賴て以國運の伸張を期せんとするに在り。

所謂社会政策なる者は是も亦十九世紀中葉以降に於ける世界の現象にして、広義に於ては社会一般の改良なり。狭義に於ては労働問題なり。国民の福利を保全し且資本と労働との權衡を調和し、資本家をして資本適當の利益を失はざらしむると同時に、労働者をして又労働相當の待遇を得せしむるが爲めに或は國家の權能を以てし、或は自治体の監督を以てし、或は國民各自の經營に委し、或は又便宜三者を併用するの方針を採り世界の競争場裡に大步濶歩し以て國家國民の福利を保全し増進せんとするに在り。

曰世界政策、曰社会政策、二者外觀上或は相容れざる所あるが如しと雖も、其實世界政策は外に向て國民の福利を保護するの利器にして、社会政策は内よりして国力の發展を保持するの泉源なるが故に、二者恰も車の兩輪の如く鳥の双翼の如く兩々相待て而して各々其用を全ふするは此二十世紀に於ける世界の大勢にして、吾人が吾帝國の世界に於ける一大使命を鼓吹せんとするに當りて二者決して其一を欠くべからざる所以全く茲に存す。

○智者千慮有一失、愚者千慮有一得。

○豊腴優雅なる風手中自ら尊嚴の相を具るあり。

II — 170

II — 171
II — 172
II — 173

○国家

セルドン

騒擾せる国家に於ては暴風河水を巻くの時、に於ては小舟を御する如くなさざるべからず。直行して以て河流を渡らんと思ふ勿れ。怒水舟を沈むるの恐れあり。宜しく彼と共に浮沈せよ。而して便利の許すだけは風波に逆ふ勿れ。

II - 174

○徒らに希望す可からざるの希望を起し、尽すべき義務を尽さざるは是れ其の分に安ずるものにあらざと云ふに在り。

II - 175

○富貴貧賤は天にあらず、地にあらず、又国家にあらず、銘々の一心にあり。常に我身を修めて人を治むるものは富貴其身に備ふ。常に我身を人に治めらるゝものは家業を勤め分を守りて富貴を保つ。常に我身を人に治められて我意に任ずるものは貧賤其身に備ふ。元と富貴貧賤は一心一念の変化する処なり。本来同志遠隔なき事を悟りて共に勤行すべし。

富と貧とは元と遠く隔つものにあらず。只一つの心得に在り。貧者は昨日の爲めに今日を勤め、昨年の爲めに今年勤む。故に終身苦んで其の効なし。富者は明日の爲めに今日勤め、来年の爲めに今年勤む。故に安楽自在にして事成就せずと云ふことなし。然るを世の人今日飲む酒なき時は借りて飲み、今日食ふ米なきときは又た借りて食ふ。是れ貧窮すべき原因也。今日の薪を取て明朝飯を炊き、今夜縄を縛ふて明日籬を結はゞ安心にして差支なし。然るを貧者の仕方は明朝取る薪にて今夕の飯を炊かんとし、明夜縄を縛ふて今日籬を結はんとするが如し。故に苦しんで効成らず。

II - 176

○生活するには食物と運動とが相伴はねばならぬと云ふことが明かである。其処で食物には固体と液体との二つあるが、先づ何程喰へば宜しきかと云ふに、是れは腸胃の吸集力如何に存する問題であつて、若し腸胃が吸集力次第喰ふ

て居れば申分ない。即ち大に食して大に運動するのである。彼の農民の如きは比較的疎食を為して居れども、夫は腸胃の吸集力が強大であるから大に喰ひ大に運動するに依て營養充分に身体が健康なのである。然るに上流社会の公達が美味を食らうて居るが健康が勝れて居らん。是れは腸胃の吸集力が弱いからである。斯く説き来れば運動と食物とが一致せねばならぬと云ふことが明瞭するであらう。

此の食物には營養的と刺激的との二者あることを知らねばならぬ。營養的の食物とは米、麦、麵、肉類、芋、大根の如きものである。刺激的の食物と云ふは胡椒、唐辛、其他辛味のもので、酒はアルコールの質を有して居るから無論營養的でなくて刺激的のものである。此の刺激的の食物と云ふは全体の力を一局部に集めて一時に大なる力を出すの効用があるのであるが、一旦出して仕舞へば元氣がそれだけ消耗するから是非とも是れを補充せんければならない。是れは身体と食との關係であるが、社会と云ひ国家と云ふも恰も此の關係と同一のものである。

○武士道は既に我國民を教養したり。国運既に一転す。此武士道の素ある國民に向て更に良市民たるの教養を与ふるは即ち時代精神の要求なりと謂はざるべからず。

○今や四民平等、個人の位置は認識せられ、人と人との關係は法律を以て規定保護せらる。人は皆自由ならざるべからず。人は皆独立ならざるべからず。大なる自由、大なる独立の中よりして此に新なる秩序を生じ、新なる階級を生じ、新なる愛國心を生じ、新なる憲法的精神を生じ、新なる世界的識見を生じ以て社会的制度を改鑄せざるべからざるに至れり。

○夫れ維新中興以來三十有余年進取の皇謨は上下の漸く倦む所となり鋭前の国是は官民の稍々厭ふ所とならんとす。維新の元老半ば凋落して後進の俊秀徒らに中途に彷徨す。消極の陋風、退嬰の習氣動もすれば我が社会の中心を浸染せんとす。

○若し夫れ一勝一敗は軍事の恒のみ。故に勝利固り喜ぶ可しと雖ども、決して此れがために氣驕り、意怠る、可からず。或は一時の挫折を万一に際して来すあるも決して深く意に介するに足らず。要は唯だ平和を永遠に克復し以て帝国の光榮を保全し且發揚するにあるなり。是れ則ち吾人臣民が大詔に奉答する唯一の道なり。然り、唯一の道なり。

II-181

○吾人は決して戦捷の快感を我が国民より滅殺せんと試みるにあらず。但だ余りに戦捷の歓楽に酔ひ、心驕り、士氣惰るが如きに至らば一端の小蹟の爲めに或は不測の頓挫を來たさずとも期し難し。況んや驕り且つ惰るの結果は倦み且つ厭き倦み且つ厭くの結果は餒へ且つ衰ふるは必然の数なるに於てをや。知らず、此の如くして焉んぞ重きを負ひ遠きを致すを得んや。吾人の偉大なる祖先の一人たる徳川家康は曰く、勝て胃の緒を締めよと。吾人は今日を以て我が腹帯を引締むるの一時なりと信ず。露人は嘗て曰はずや、吾人は總ての点に於て日本に輸く、但だ吾人が待みとするは日本人を懶殺するにありと。蓋し是れ我が国民の初め頗る剛銳にして中ごろ漸く倦疲困厭に赴き遂に萎靡不振に終るを看破したるの語にあらずや。吾人は必ずしも此の予測を以て正確なりと断言するを欲せざるとも、亦た我が国民の堅志硬行に訴えて此の予測を全く画餅に帰せしめんことを熱望せざるを得ず。

II-182

○凡そ事物の真相を誤まるもの淺膚なる概括的文字より甚だしきはなし。吾人は未だ曾て亜細亞的なる文字の如く大いなる誤解を世界に与えたるものを見ず。而して若し世界に於て我が日本国民の真相を誤解せしむる者あらば、それは恐らくは亜細亞的文字ならざるばあらず。彼等惟らく、日本国民は亜細亞的なる故に其抱負は黄色人種を率ひて白哲人種に反抗するにあり、彼等の希望は鉄木真、帖木児の業を再興するにあり。凡そ我が帝国及国民に対する一切の猜疑、一切の嫉妬、一切の恐怖更に切言すれば一切の嫌惡総て亜細亞的なる文字に概括せらる。是れ豈に危険千萬なる断定にあらずや。

II-183

○日本国民は今尚ほ成長の途上にあり。故に其の過誤、欠点、弱所に就ては自から知るを以て満足せざるのみなら

ず、敢て他の指、摘、誨、誠を、驩、迎するに、吝かならず。されど吾人は吾が国民に固有せざる、例せば印度人、蒙古人、支那人の優長したる性格に就て其信用を分配せらるゝことを屑とせざると同時に、又た彼等の劣等なる性格に就ても其の非難を分担するを欲せず。吾人は日本国民として世界に高歩するの雄志あるを隠蔽せず。されど唯だ日本国民としてのみ、大和民族としてののみ。蒙古人種としてにあらず、亜細亜的としてにあらず。

II - 184

○亜細亜の盟主たるの野心にありと為すものあれば、そは我が国民を買ひ被りたるに過ぎず、我が国の急務は自国の力にて支配するにあり。約言すれば自衛にあり。即今日露戦争の如きも只だ自衛の二字にて之を尽すを得べし。但だ国家として存在するには一日も静止する能はず。進まざれば則ち退く。我が国民の膨脹を期するは他を侵略するにあらず、唯だ国民としての存在、正しく言えば健全なる存在を保障せんが為めののみ。

II - 185

○我が国民の今日に於て最も関心するは世界の好意なり。我が国は世界を敵として自個の意志を彊行せんと欲せずして世界を味方として自個亦た其の一要素となり、文明、社会、共有の慶福を取得し、普遍の恩恵に頼らんと欲するにあり。故に我が国民の眼中には人種もなく宗教もなく言語もなく風俗習慣もなし。其のある者は唯だ自国対世界なり。吾人は東亜を味方として歐洲に向ふものにあらず。黄人種を率ひて白人種に抗するものにあらず。さりとして歐洲人の先駆となりて亜細亜征伐を企つるにあらず。有体に云へば吾人は自国を除けば無差別なり、平等なり。強いて差等を設くるの必要あらば其の同情は第一等国の文明的列強に在りと明言するに憚からず。若し国民を一片剥ぎ来りて觀察せんか、流石の黃禍論者も鑿然として吾人が言の率直にして且つ条理あるに嘆服せん。

II - 186

○吾人は有力なる巡洋艦と戦闘艦との沈没の源因を単に油断なりと速断せむと欲するものに非らず。然りと雖も此の最も不幸にして最も悲むべき変災は、我が海軍及び国民に対して更に一層周到にして細心なる注意と警戒を催求するの薬石たるべしと思ふ。今や我が国民戦へば必ず勝つものと思ひ、天祐は常に我に幸ひして戦勝は収め易きものと思

ひ、勝利に狂れて心、或は驕り、氣聊か緩み、振古未曾有の時局に際して戦時と平時との區別をすら無視せんとする傾無きに非らず。是れ今日に於て最も警戒すべきことならんや。

II - 187

○吾人は今回不測の変災の犠牲となりし両艦と其の乗組員とに對して深厚なる弔意を表すると共に不幸なる出来事よりして最善の教訓を見出し、以て将来に於て更に注意と警戒とを嚴にするの藥石と為さざる可らず。若し此の出来事にして更に我が海軍及び國民の注意を嚴重にするの藥石たるを得ば、今回の変災は永く我が國民の悲痛にして有力なる教訓たるべきなり。

II - 188

○吾人は露兵に向て多少敬意を表せざるを得ず。彼等は決して弱兵にあらず、彼等の陣地の堅固なる、彼等の抵抗の頑硬なる、実に我が日本軍の好敵手たるを辱しめず。然も其の遂に我軍の爲めに戦ふ毎に敗らるゝ所以は、我軍の渾身皆な忠義、渾身皆な紀律、渾身皆な職分、渾身皆な責任、而して渾身皆な愛國なるが爲めのみ。

II - 189

○其の議論の突飛なるも極端なるも余りに反動の勢に驅られて常理に反し常識に背き、時としては悖理謬戾なる、決して怪しむに足らず候。

II - 190

○國民の性格には科学趣味より重要なものあるは吾人の素論にして、日露の交仗は更に新なる證據を提供したり。是れ欧米の觀察家も亦一致する所にして吾人は前日此点に關して指摘する所ありたり。貴族の性格に至りては其重要な点益々明瞭にして断じて芸術の末にあらず。上流社会として國民の儀表として頼りて以て一國の品格を高尚ならしむ。是れ其の主眼なり。貴族、平民の階級を設け其の教育を特別にするは根本に於て議論ある事なるべけれど、既に貴族あり既に学習院ある現制に就て論ずれば自ら此の如く區別せざるを得ず。而して華胄の裔、富豪の族を國民の上流に置き、之をして社会の紀綱を統べしむる制度は他の一般の自由振張する社会に於て必らずしも惡制なりとせず。英国の今日あるは実に之れが爲めにして英人の誇る所亦実に此処に存するにあらずや。吾人は我立憲制度の将来の爲

めに貴族の将来に囑望する所大なり。

II 191

○連日連夜の激戦を続行し能く艱難、欠乏に堪え、苦戦奮闘したる将校、下士卒の堅忍、不拔なる行動は、実に賞嘆に堪えざる所なり。

II 192

○〔註、欄外に「明治三十七年九月四日神戸『クロニクル』とあり」日本に於ては維新以来勤王の士氣勃興したるのみならず、教育上に在ても断えず之を鼓吹したるを以て其結果人々の行為に影響したる所少からず。勿論此勤王旨義は幾多の宗教上の信念を含みたるは云ふ迄もなし。而して今次の戦争に際しては各軍の司令長官は戦勝の原因を常に日本皇帝の稜威に帰するを以て全く定式となすに至れり。然れども此は稍々危険の傾向なきに非ず。何となれば此の如くせば敗戦の場合に在ては其責任の帰する所に関して一問題を惹起すなきやの懸念なしとせざればなり。今戦勝を以て死者に永久の冥福を与ふる天帝の懿徳に帰する信念と之を以て唯だ僅に死後其家を表彰するに止る人君に帰せしめんとする信念とは各々其趣を異にするを知らざるべからず。而して其行賞すら實際僅に高位高官に列する少数の者の上に局限せられ、大多数の者に至ては固より之を望むこと能はず。後者に在て唯だ一の褒賞は唯だ多数の人と共に国家に殉じたりとの国民的記念たるに過ぎず。此を以て之を觀れば忠君は無論日軍志氣の一要素たるも未だ以て其全部を説明するに足らず。

更に心理学の見地よりして此の現象を考究するときは極めて趣味あるを覚ゆ。熟々日本の軍隊を觀察するに、單に卒伍の間に斑するものは大概来世の事に就て漠然たる思想と朦朧たる信念とを懐けるに過ぎず。将校に至ては其多数は全然此の如き信念を有せざるなり。然れども将校は勿論假令士卒と雖ども成功を収むるに必要な場合に於ては、偉大なる胆勇と決心とを顯はし其生命を賭して危険を冒しつゝあるは恰も夫の来世に就て信心最も堅固なる者と異なる所なきが如し。果して斯の如くなれば、全世界が超性説を没却するに方り其の当に来るべき結果に関する某者の断

然たる予言を駁正するに足れり。吾人の所見に従て之を説明すれば是れ人種に因由するにあらず、又宗教に因由するにあらず、又忠義に因由するにあらず。主として数百年來日本に養成せられたる名譽心と之に附随する公共心とに存す。斯の如く説明するときは勿論僅に問題上一步を進めたるに過ぎざるの嫌なきにあらず。如何となれば日本人は何に就て此の凛烈なる義勇奉公の意氣と武道尊重心を得たるやの問題を惹起すればなり。吾人は乃ち之に答ふるに名譽を以て其本分と思惟せる武門社会の發達を以てせんとす。此の名譽心の發達は恐くは極めて遲緩なりしならん。何となれば吾人は軍事的名譽と個人的奸曲とは必ずしも常に併立し難きものにあらざるを知ればなり。加ふるに祖先尊崇に依て稍々其形を表はしたる家名の尊重は亦人をして其家名を汚すの行為を慎ましむるが故、家名の尊重は名譽心の發達上一の要素と為りしこと亦疑を容れず。然れども祖先尊崇が人を率て善道に進ましむるに方て先に社会に於て凡そ何物が名譽の行為にして何物が不名譽の行為なるかに付、多少一定の意嚮あるを仮定せざるべからず。日本に於ける名譽心は猶ほ他の諸國に於けるが如く当初武門の血族中に進化したなり。其次第は武職は唯一の業務として敬重せられたるを以て名譽を尊重するの風儀は漸々として広く一般庶民に伝播したるなり。故に日本に於て今より僅々一代前即ち武門時代に際して養成したる名譽心と戦敗を賤む廉恥心とは、目下徴兵に應じて身を卒伍の間に投ずる農民商賈（賈）の中に在ても、尚ほ曾て農民を輕侮し商賈を蔑如したる武門時代の武士に異ならず。加ふるに教育も亦武士の理想を不朽に伝ふるに与りて力あるものにして、其効果は嘗に彼等が攻勢を執るに勇敢にして、其防衛地を固守するに頑強なるのみならず、尚ほ又國家の利害に關して必要なる場合に臨まば一人として死を恐るゝ者なきこと、現に其軍隊の動作に於て表彰せられたり。先きに破壊的事業に応用したる此の精銳なる名譽心は將來組織的問題に応用するの時機詳言すれば恰も軍事に於けるが如く商業上に將た政治上に於ても個人的責任を重んじ、且つ家名を重ずる名譽心を發揮するの時機到來するを期望せずんばあらず。吾人は曩に此の事に關して所得税の實地問題に就て評論し、且其兆

侯^{〔侯〕}の太だ著しきもの有ることを表明したることあり。故に若し夫れ教育方針として、從來武士道の發達を鼓吹したると均しく公共心の程度を進歩せしむるの道を講ぜば何ぞ現下の戦争に於けると同様の成功を収め得られざるの理あらんや。然れども此の元気を養成するの必要は常に日本に於て然るのみならず世界各国に於て皆然りとす。且つ其困難なるは決して武勇を涵養するの比にあらず。

○節分

立春の前日なり。冬の気悉く尽きて青陽の氣を迎ふる時節なれば、陰氣を追ひ陽氣を迎ふる故追儺と云ひて大音を發して大豆を打ち陰氣を退くるなり。

八十八夜

正月節より八十八日目なり。草木共に此夜降る霜にあたれば枯れいたむ。故に庭の植物等には霜覆を為すべし。

入梅

五月節の後壬の日に入り六月節の内壬の日にあくる凡て三十一日の間なり。此中は霪雨と云ひて湿の深き雨ふる故、人の身にもあたり衣服書物の類凡て黴を生ずる故此雨にあたられ様防ぐべし。

半夏生

夏の中分にて半夏^{はんげ}と云へる毒草生ずる節なり。此日迄に農民は田を植納むるなり。此日を過ぎて植れば実のらずと云へり。此日は天より毒を降す故前夜井戸に蓋すべしと云へり。

二百十日

正月節より二百十日目にあたる日を云ふ。此日は秋の氣十分に至りて金氣盛なれば大に風吹く時節なり。此日風雨あれば稲実のらざる故諸人此日の風を恐るゝなり。

土用

春夏秋冬共に之れあり。各十八日宛なり。此節に万の種を蒔き又柱立、井堀、壁塗或は堤の普請、築山其外一切土を動かす事を忌むべし。

彼岸

此日は二月の中より六日前と八月の中より一日前彼岸に入るなり。凡て七日の間なり。此間は昼、夜、等分の時節なる故に悪事を除くの外何事を為すにも障りなし。

社日

二月八月兩度これあり。二月中の日と八月中の日に近き戌の日なり。此日は農民は土の徳を尊みて祭る日なり。此日に雨ふれば豊年の兆と云ふ。春の社日の頃種を蒔き秋の社日の頃刈り收むるなり。但し婚礼には忌むべし。

II - 194

○体育と運動との関係。予の呼んで体育といふは、社会の一員として個人を教育するに当り、其の基礎たるべき身体を養育鍛鍊する方法を云ふ。而して運動とは体育の手段として有意的に身体を活動せしむるものを意味す。故に運動は直接には体育の目的と合し間接には教育の目的と一致せざるべからず。

II - 195

○徳川氏の末葉民風頹廢の時に方り身を匹夫より起して力行自助を奨め勤儉推譲を説き以て回瀾を既倒に済ふに努めしもの、噫是二宮尊徳翁にあらずや。今や翁逝て茲に四十有九年、其の流芳遺風深く後昆を感化して報徳の教日に盛を加え、其民政に貢献する最も少からざるを見る。生て時難を拯ひ死して億兆の範となる、翁の徳亦偉なりと謂べし。

II - 196

○時勢常なく事機定なし。

II - 197

○人は窮地に陥ることあり。逆境に擠さるゝことありと。或は水を失ふたる魚の如く林を出でたる野獸の如く殆んど自から処分に困まる場合なき能はず。所謂一転の氣は斯る場合に於て殊に必要なりとす。吾人は如何にして逆を転じて順となし負を転じて勝となし危を転じて安となし禍を転じて福となし失敗を転じて成功となす可きやを考慮するを要す。蓋し弾力ある精神は如何な境遇に処しても決して袋町に躊躇せず自主的の意志は如何なる場合に在りても決して窮地に永住せず。

II - 198

○吾人は自主的の意志弾力ある精神のみを以て満足すべからず。更らに此れと与に湧いひて泉の如くなる神機靈覺を要す。是れ一朝一夕急場の猝か仕事にあらず。平昔静定の功夫あるにあらざるよりは焉んぞ此の如くなるを得んや。所謂素養の忽がせにす可らざる所以此に於て明けし。苟も我に素養あらば一芸一能の士と雖も、其の芸能の範圍に於ては泰然として動かず、悠然として迫らず、綽然として余裕あり。之を推せば万般の人事皆な然らん。若し夫れ得意に処するの道は失意に処するに比し寧ろ難きを加ふるに似たり。然も其理に於て一のみ。唯だ疆めて息まざるにあるのみ。吾人は決して退一步の心配を要せず、唯だ更新一転の功夫を要するのみ。人若し現状を改善するの精神あらば如何なる場合とも決して其の仕事なきに苦しまざる可し。

II - 199

○今回の戦争は吾人に向て待期したるよりもより多くより大いに露国の弱点を暴露したれども、復た他方に於ては吾人の予想以外に露人の愛好す可く且つ尊敬す可き点を誨示したるに似たり。露兵の辛抱強きと勇猛なることには実に我が軍隊をして嘆賞の音を発せしめたり。而して彼等が過分に獸の情火を有すると同時に宛も小児の如き無邪氣なる淡泊なる、且つ快活なる意氣と心腸を有する事を識認せしめたり。

II - 200

○激戦の余双方の屍体を片附くるために霎時の局部的休戦を約し両軍の将士が撃つ、砕く、切る、突くの一刹那に手を握り杯を捧げて、懷を開らき襟を解きて撃話懇談したるの事を叙したる事也。蓋し此の会合は日露戦史の最も光明なる

頁にして、然も其の場合に恰当なる手筆を此処に見出したるは実に意外なる仕合せと謂はざる可からず。然も此の光明の唯だ一霎時に止まらずして前に耀き後に輝く可きは吾人が日露両国のために満腔の積誠を傾くる祈禱也。 II - 201

○我兵は剣を以て敵に克つを知りて未だ其他を知らず。僅に二、三時間前の敵兵は今や敵として敵を見ずして朋友として相親近し居るなり。其寛宏なる雅量と多情なる義俠とは蓋し日本武士道の特點として永く世界に誇るべきところなる可し。 II - 202

○今茲に士族の頌徳表を草せんとするにあらず。されど維新の改革にして若し特殊の階級に負ふ所ありとせば、それは士族の階級にあらずして知らず、何の所に之を求む可き。貴族を刺戟したるも士族なり。平民の眠りを覚ましたるも士族也。民権論も憲法も或は大仕掛の商工業の如きも殆んど士族の手を藉り士族の力に頼らざるものなかりき。乃ち今日に於ける日露戦争も士道若しくは士族化したる精神に負ふ所多大なりとす。知らずや、近來物珍らしく世間に唱道する武士道なるものも畢竟士族の階級に特発したる教条なることを。若し武士道なる者が如何に日本国民の性格を陶冶したるかを知らば、併せて播籃は何辺にあり武士道の宣伝者、実行者は何れ階級にあるかを知らざる可からず。 II - 203

○彼の偉大なる祖先の好個の代表者なりき。同時に彼は清純なる高調なる、而して勤勉なる生涯を送りたる人物なりき。 II - 204

○英国貴族の高雅寛厚なる精神を見る也。彼等は平民的勢力の敵に非ず、寧ろ其の過激俗悪の弊を矯正調和する勢力として健全なる感化を及しつゝあり。乃ち今日に於ても英国は全く貴族に支配せられざるも、多く貴族に指導せらるゝと謂ふは精當なる見解に庶幾し。 II - 205

○夫れ我が国の士族の如きは生活上の革命の爲めに今や殆んど空名と做り了りつゝあり。古は士族の子は士族なりし

も、今は土族の子は土族にあらず、肩書にこそ土族の名称は留り存するなれ、所謂、己を捨て、公に奉ずる、献身的精神も、義を見て勇む、猛気も一毫も取らざる、廉潔の心腸も恥を知り、体面を重んずる性情も七難八苦を事ともせず、堅忍力行の氣質も土氣的階級の消滅と与に、仮令消滅せざるも減少しつゝあるは是れ亦た隠くすの必要な趨勢たるが如し。

II 206

○家庭のくさくさ

衣食住、衛生、疾病、育児、教育、手芸、社交、身嗜み、話の種其他一切家庭に関する事柄。

II 207

○過去の成功を祝すると共に前途の任務益々大なるを深く心に銘じ飽くまでも堅忍持久事に当りて最後の光栄を全うするの覚悟を怠る可からず。

II 208

○孟子自レ范之齊望見齊王之子二喟然歎曰居移レ氣養移レ体大哉居乎

II 209

○今や拳国一致軍人は外に戦ひ国民は内に勉め誓て交戦の目的を達せんとして尚之を達する場合に至らざる間は堅忍持久の精神を以て事に当たり光栄ある終局を収むる事を期すべし。

II 210

○世界には虎狼の心を懷くものあり。日米両国を離間して奇利を其間に博せんとする者あり。而して将来の日本を活動の日本とせば将来の米国は更らに活動の米国たる可き勢あり。されば一たび両国情意の疎通を欠くに於ては或は不測の憂を双方に生ずるの虞なきにあらず。吾人は決して過去の国交に安著して将来を油断す可らず。

II 211

○国家的事業の拡大せらるゝと同時に公務に従ふ者の清廉公正を要求するの度は愈々厳密ならざるを得ず。国家が大仕掛けにて仕事を為すに際して若し其の職任に膺る者にして不謹慎ならば天下の事知るべきのみ。是れ官吏及び公吏の清潔法等閑にす可らざる所以とす。

II 212

○海舟先生は近世精神的解脱の高人也。其の門下生の一大患に罹るや先生嘗て精神的療法として左の語を大書して

彼の病牀に与へたり。

年々億万慮総は盲想放_二下其盲想_一以_二精神_一措_二其足心_一是氣血循環之精涼法也

是れ精神的病魔を驅るの檄文也。其の盲想を放下し精神を以て其の足心に措くものは豈に氣血循環の精涼法のみと謂はんや。復た實に精神的解脱の処方のみ。吾人若し逆上の氣味あらば須らく心を脚趾に措く可し。吾人若し風雪の苦に耐へざらんには心を春風百花の裡に措く可し。人一方に傾注する時には他方には必らず虚隙を生ず。所謂虚実相濟ふは是れ精神的解脱の三昧に庶幾きものにあらざるや。

○四徳は婦徳、婦言、婦工、婦容。

○精神剛健ならば煩悶厭世の愚亦自ら其の跡を滅熄すべし。

○平素自から摂養に汲々たるは母人をして其細心の注意に驚かしたる程にて如何に克己の精神自修の念に富みたるかを知るべきなり。

○人間の運命を支配する自然の暗示といふことを思ひ浮べた。即ちこの場合偶然某外交官の遣て来たのは彼が自分の或る運命の鍵を持つて居るのではあるまいか、否、さうに違ひないと考へたり。

○天の命ずる所に従て慰勞療苦の道を取れば再び元の壮快なる精神に立戻つて来る。又力を勞するにも無暗と労働を続けると漸々身体が疲れて来て動くことが嫌になる。其嫌になるのが是れ亦重要な感覚である。その時分には労働を止めて休息すると筋力再び元に復し或は却て元よりも強くなるものだ。

○喉が渴いたら水を飲み腹が空いたら飯を食も宜いけれども、併し道理を弁へぬと飲食するにも其品質と分量とを、定する事が出来ず、暴食濫飲して却て身体を害するやうな結果を生ずる。斯る場合には何に抛て之を鑑査すべきやと云ふと、主として学問上の研究に頼るより方法がない。従つて無智、無学なるものは勢ひ不規則に流れ易い。

○学問的の衛生に頼らなければならぬ。否らざれば吾人の性命と健康とを完全に保持して行くことが出来ぬのである。
II - 220

○明治三十九年八月二十日長与先生の注意

一、毎朝食事前十分又は十五分間庭園運動の事

一、毎朝大便に注意し硬便なれば野菜、菓物等を喫し、之に反し軟便なる時は其日の食事に繊維ある野菜、菓物并鉾泉類を控える事、亦一回、二回位の下痢の折は成る丈け食事を控目にし、第一に繊維ある野菜、菓物、脂肪の肉、バター、牛乳、生野菜即ちサラダ、鉾泉類、アイスクリーム等を謹むべき事、自然腸に痛みある時は微温湯三合に塩を匙入れて灌腸する事。

一、下痢の折に痛みあるか又は数回なるか或は熱氣ある時は直に医師の診察を乞ふべき事。
II - 221

○精神剛健ならば煩悶厭世の愚亦自ら其の跡を滅熄すべし。
II - 222

○如意吉祥幸福寿命双全
II - 223

○誠動天地
II - 224

○積徳
II - 225

○眞の衛生と云ふものは、心に蟠まる憂を去り、恐怖心などを起こさず、毎も平和なる心を保つて居るのが即ちそれです。此点に深く注意して衛生思想の発達と共に起った弊害を一掃し其発達の方針を過まらぬやうに勉めねばならぬと思ひます。
II - 226

○斯る次第なれば日本が不評判なりとて彼是神経を起し心配を為すは余計の御苦勞也。他人の疝氣を頭痛に病むとは此事也。日本は何処までも日本の本領を発揮して傍若無人に横行闊歩す可きのみ。
II - 227

○理窟は一応も二応も前述の通りなる可く候。されど国家の利害より、打算し来れば、日本が世界の同情より孤立するは如何。理窟は理窟として利害の点も可要考慮候。

II - 228

○此方の不注意、不取締、不節制の為に自から好んで他の誤解を受け他の悪感情を買ひ他と怨を結ぶが如きは決して知者の業と云ふ可らず。掛念は此事に候。

II - 229

○修養省察、臥薪嘗胆、隱忍耐持、自覺の本心、道念、健実、剛健贊実。

II - 230

○凡そ富むてゝ事は正当に富み且つ正当に其を使用してさえ往々世人の嫉視怨恨を招く者なり。

II - 231

○時事小言

宮相更迭の風説が又々伝はつて来た。風説には後任者の下馬評が付物に為つて居るのは申すまでもない。現宮相辭任のことが果して事実になるか如何か未だ分らない場合に後任者の人選を云々するのは少々先廻り過ぎるか、仮に我輩の註文を申せば第一重、厚、恪、勤、真に、宮中の儀表たる可き人物たる可きは無論のこととして、別けて注意を要するは宮内官たる職務を喰物にする様な人物は是非候補者に入れないで貰ひたいのである。由来宮内官吏は九重の辺りに咫尺する身分であるから、其風紀も特に振肅して居なければならぬ筈であるのに、如何はしい取沙汰を受けるものが案外に多数な様子である。そして其取沙汰は重に金銭上の問題に属するさうだ。して見ると其宮内官吏の長官たるものに此弊風を矯正するの心掛がないのみか、却て之を幸にして自己の地位を濫用し私利を営むことに為れば実に容易ならぬ次第と云はねばならぬ。斯様な恐のある人物が宮相の後任に擬せらるゝのは絶対に反対である。又宮内大臣が一種の朋党の手先に為つて職務上偏頗な処置に及ぶときは其弊害は当人が私利を営むどころの比でないから、其疑の懸るものは候補者として尚更ら以て禁物である。

○英雄とは何ぞや。虚声に恐れず、事実立つものなり。

II - 232

233

○分に安んぜよとて、昨日も今日も明日も只同一程度に安着せよと云ふにあらず。昨日には昨日の分あり、今日は今日の分あり、明日には又明日の分あるべし。所謂る貧賤に素にして、貧賤に行ひ富貴に素にしては富貴に行ふとは此事也。

II - 234

○吾人は境遇によりて変じ位置により変じ、又た内部の情態によりて変ず。変ずれば変ずる丈けの事を做すが即ち我が分限相応の事を做す所以とす。此の如くして随处主たらざるはなく此の如くして立処主ならざるはなし。

II - 235

○分限を知るは精力の集注也。又精力の儉約也。随て又た精力の活用也。吾人は如何なる場合たりとも自個の繩張丈けは有せざる可からず。乃ち分限を知るとは自個の繩張丈けは有せざる可からず。乃ち分限を知るとは自個の繩張を知るの義也。斯の如くして繩張以外の事は兎にも其の以内に於ては一步も仮さず一步も負けず頂天立地我が版図を占有するを得る也。

II - 236

○世に万態ありて一信足らずと云ふ諺あり。是れ自個の分限を知らず総ての物を羨み総ての人と競ひ一生營々として遂に成す所なきを謂也。吾人は世の天才者若しくはそれに庶幾を者にして往々意外なる失敗者となるを見て其の理由を知るに苦みたりき。而して今にして実に其の理由の十中八、九は自個の分限を知らざるの結果たるを知る也。人間は千手観音にあらず、乃ち比公の雄鷲を以てしても兵法に於てはモルトケ元帥に譲らざるを得ず。能はずの一字は愚者の字引のみ存すると称すれども自から能はざる者にして初めて自から能ふを知る可し。而して自から為さざる所ある者にして初めて自ら為す所ある可し。

II - 237

○能はず為さざるは是れ分限を知るの第一著也。能くし為すは是れ分限を知るの第二著也。所謂る成功の秘訣なるもの他処にあらず、唯だ此処に存す。即ち自個の力を量り其の為し得る範圍其の為さざる可からざる範圍を認定し此に

向て、其の全力を傾倒す。一切周囲に煩著なき也。彼は彼たり、我は我たり。此の如くして若し成功なくんば世の成功ある可からず。

II - 238

○若し夫れ真成の安心立命なるもの此の如くして初めて得らる可し。力相応の重荷を担へば別に失望もなく煩悶もなき也。何んぞ況んや、他人の榮耀利達を羨望するが如きは棄にたくもなき筈也。彼は彼の分限を尽し我は我が分を尽す。彼の我事に関らざるは我の彼事に関らざるが如し。思ふて此に至れば吾人は家康の訓言を服膺せざらんと欲するも能はず。

II - 239

○全体家柄の華族といふものは一方から謂へば歴代浮世の風波から遠かつて居て赤裸の一員として劇烈なる競争社会の劣者である。語を換へて云へば永き歲月の間に退化した人類の一群である。勿論悉くとは謂はぬが。

II - 240

○容貌態度甚しく威厳を持し、一笑一顰苟くもせず、君皇の大使命を帯びたるの自覺心極めて強きものゝ如し。

II - 241

○彼は斯る物件を持ち出してデスレリーに赤恥をかゝするには余りに紳士たりし也。デスレリーの狡猾なる、ピールの斯の紳士的行徑を濫用して却て逆さに証拠呼はりをしてピールを誣妄者に擠したりし也。

II - 242

○日本開国時代の武士道も唯だ至尊の勅に従ふとのみに非ず。至尊の勅に従つて屍を戦場に曝らすは天神地祇の命ずる所なりとの信仰ありて心の底より身を國に献げたることなり。世移り星換ると雖も、武士道が周囲の圧迫に非ず法律制度の威力に依りて強て人を或る模型に鑄らんとするものに非ず。人間たる尊貴の品位を維持し本心の決断に従ひ好んで身を献ぐるものたることは一なり。今の世には個人主義、集合主義など云ふことあり。武士道は人間の一身を共同生活体に献ずる点より云は集合主義なれども、而も此犠牲は奴隸が残忍なる主人の墳に殉ずるが如き強迫的、機械的の犠牲に非ず。人間の品位を寸毫も墜さず自由の意思に依り独立の判断に従ひ好んで自己を献ぐるものたる点より云は個人主義と云ふべきものなり。

II - 243

II
244

○福如海、壽似山、福海、壽山、富貴、長命、福壽、長壽多福
○僧位、僧徒に授けらるゝ位階なり。但僧官とは別なり。

法印（一等） 少將に准ず。僧正の官に相当す。

法眼（二等） 侍從に准ず。僧都の官に相当す。

法橋（三等） 五位の諸大夫に准ず。律師の官に相当す。

以上は後醍醐天皇建武中に定められ爾後之を用ひ来りしが維新の後を廃せられたり。

医者其外剃髪の者は僧位に叙す。儒者、絵師等皆是なり。

○盲官 盲人の官

検校 法印に准ず。元と僧官の名なり。

勾当 法眼に准ず。 全 上

座頭

衆分

II
245

○然るに相統者杯の事は殆んど無頓着に附し去り、唯目前の用務に趁はれ其の当用さへ弁ぜしむれば足れりとなす。
此に於てか強將の下弱卒多く名長官の下愚属吏多からざらんとするも能はず。 II 246

○後進の先進に及ばざるは当然也。されど後進をして先進の地位に達せしめて果して尚ほ及ばざるや否や。吾人は先進者が後進を待つに於て這の地位の二字を乗除して其の真価を定めんことを望まずんばあらず。而して彼等が相統者となりて先進者の地位に達する場合に於て遜色なからしむるは是れ誰の責ぞ。 II 247

○吾人は先進者が後進を養成するに就て其注意の足らざるに不満なると与に後進者の向上心の欠乏にも頗る遺憾なき

能はず。今の後進者をして、唯だ鰻上りに其地位を進め一日暮らしに其の日を送る外他に何等の抱負もなく熱心もなきが如きは、彼等が自から老成したる為め乎、將た自墮落なる為め乎。

II - 248

○養成するとせざるとは他人にあり、養成せらるゝと否とは自個にあり。縱令先進者が後進養成に怠慢なればとて若し後進者にして自から疆めたらんには、豈に自から立つ所なくして止まん哉。

II - 249

○調子外れの野心や相場崩れの名誉心や若しくは素人嚇しの虚栄心やそれ等は後進者の最も警戒すべき一たる也。

II - 250

○然も今日よりも明日は一步を進み明日よりも明後日は一步を進まんとする向上心と修養的工夫とに至りては是れ後進者の生命なり。我を誘掖する先進あるも此の如けむ。凡そ世の中に人材道楽程愉快なるものなし。天下豈に其人なからんや。然も要唯自個の進歩に俟也。

II - 251

○現代は個人の權威に重きを置き古来の道德戒律を侮りて無意義の繩墨と称し、かゝるものゝ制約より解脱し本能の導く儘に振舞ふ等は意味ある生涯の様に思ふものもあり。

II - 252

○濁りなき心の水にすむ月は

波もくだけて光とぞなる

II - 253

○日本は開国の始めより劇しき人種の生存競争ありて尚武の氣象人民の間に盛んなりしが、大和民族独り異人種を圧倒して日本全島悉く其の地となりし後も山河の勢自ら小国分裂を為し易かりしかば武道は一日も衰えず、人々常に戦ひ絶えず戦ひ、たとえ千戈収まざり四海泰平を歌ひし時と雖ども、人の心は僅に休戦の状態を保ち何人も常に其の身を君侯の馬前に殺すの覚悟を有したり。而して此の間に自ら生じたる氣習、信条、道德を指して之れを武士道と云ふものなれば、畢竟国の生命に根ざせるものなり。

II - 254

○其信ずる所を敢言するの勇氣は、歎美すべきものなれども、明哲身を保つ、道に於て用心を欠きたりと云ふべし。

II - 255

○何れの時、何れの世にも生活問題なきはなし。人として生存せざる可からずんば、生活問題は人間の先天的約束と云ふも不可なき也。但だ近世文明は此の問題を各個人に向て痛楚に深酷に打ち掛くる也。富の異常なる集散は、生活の絶大なる変化と相ひ表裏して、総ての人をして生活問題を悶却する能はざらしむ。之を希臘の古典市民が奴隸に物質的勤勞を課し、自から高尚なる美術や哲学に心を委ねたると我國の武士が禄を世にして心を生活以外の業に注ぎたるとに比すれば、実に今昔の感に堪えざるものなくんばあらず。

II - 256

○唯だ随所安心の一あるのみ。随所安心とは何ぞや。我が境遇に應じて生活する事是れ也。凡そ生活の困難なるは生活其物にあらずして其程度にあり。若し我が身分相應の生活に安んぜん乎、富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ふ可し。行雲流水隨所に順適せざるはなし。此の如くして生活難を訴んとするも殆んど訴ふ可き資料なからん。

II - 257

○奔走、運動、衝突、煩悶、懊惱したる○⁽¹⁷⁾内閣は遂に疲労、昏迷、潰裂、廢亂の極進退茲に谷まりて到頭自ら倒れたり。

II - 258

○薄志弱行とも羊頭狗肉とも卑怯末練とも殆んど之を評するに適當の語なきに苦しむなり。

II - 259

○今回の内閣組織は、前總理辭職以來二十幾日を費して漸く成を告げたる其間の成行随分短からず。會議、交渉、勸誘、辭退、調停、奔走幾回か纏まらんとして纏らず、頗る行悩みたり。

II - 260

○歴史なく徳操なき烏合団体の想像する如き浮萍主義の人士にあらず。

II - 261

○苟も國家を思ふ者は國運を益々沈淪の極に陥らしめ生民を破産の淵に沈ましむるに忍びず。

II - 262

○讒誣是れ主とするは偶々自己の品格なきを證するに止る。

○世を愚にする所以の者を求むるや百万多端之を稽かし之を誘ひ以て人心を腐爛せしめ、以て挙世の豚犬をして私門の前に匍匐せしめんと欲しき。

○例の中傷、讒誣、離間を逞ふし云々

○内閣の狼狽自滅 分取主義売恩手段 掣肘弄筆中傷罵詈謗 商売繁昌福祿到来

○自ら遂行するの力なくして却て他の成行を嫉む、是唯小人婦女の流のみ。恐くは満天下の嘲笑を買ふに止まらん。彼尚之を耻とせざるか、精神なきなり、廉恥なきなり。彼の滅亡と何ぞ異ならん。

○先輩を敬重するは社会の通義なりと雖、政見を第一義とするは政界の公道なれば社交の通義を以て政界の公道を破るべきにあらず。之を顧みずして先輩と共に動くは盲動なり。先輩に従ふは盲従なり。

○茫然自失為す所を知らざるものゝ如く〔以下欠〕

○人間の渡世一屈一伸を免れず、辛抱が肝腎也。

○昨は離間運動を試み今は人身攻撃に出でんとすと伝ふ。陋劣卑怯も亦茲に至りて極まれりと謂ふべし。

○謹厳身を処し誠実国に尽くす。

○作為構造大方を隔着、粗漏、迂濶、没徳義。

○秘密陰蔽気焰

○部下を御する、厳明にして秋霜の威ある間に自ら靄然たる春風の恩を寓す。

○大凡そ慎終追遠の典は皇室の世界に独尊たらせ玉ふ所以にして皇上の特に慎重し玉ふ所なり。

○身苟も宮内に職を奉ずる者は幾微を慎み群言を招かざる等どの用意無かる可からざるは今ま新たに言ふまであら

II - 263

II - 264

II - 265

II - 266

II - 267

II - 268

II - 269

II - 270

II - 271

II - 272

II - 273

II - 274

II - 275

じ。

II - 276

○世論宮室の内事を議するの極愈々之に驚々たるに至らば、或は尊嚴を潰すの恐れありとして新聞紙の発行を禁停したり。

II - 277

○讒誣百端構陷千状以て其地位を動かさんとす。

II - 278

○張之洞は仮令其の為せし所は其の志す所を償ふに足らざりしにせよ、其の志や卓然として山峙ち其の心や光明にして天日を照らす可し。彼は武勲の赫々たるなし。されど彼は決して摘章尋句の拘儒にあらず。彼の志や実に天下経世にありき。漢魂洋才の旨摺善採長の義以て知るべし。但だ彼や他の変法自強を主張する康有為一輩と其途を同うせず。何となれば張君は改革家にして革命家たらざれば也。然も其の改革や最も秩序的のものなりき。彼や危邦に入りて其の躬を危くせず、乱邦に在りて其身を安んず。是れ彼れの機智胆勇によると云はんよりも彼の篤実練達の致す所たり。彼や西太后に寵信せられて且つ先帝の依頼する所となり、兩宮登遐後も尚ほ北京に在りて摂政王以下と相ひ容れざるにあらず。彼や実に処世の巧を求めずして其宜しきを得たり。吾人が彼を称して君子の儒と云ふも偶然にあらず。

II - 279

○五福臨門 和氣満堂

II - 280

○五福 一曰、寿。二曰、富。三曰、康寧。四曰、攸好徳。五曰、老終命。

註 康寧者無患難也。攸好徳者樂其道也。老終命者老老也。順受其正也。

II - 281

○六極 一曰、凶短折。二曰、疾。三曰、憂。四曰、貧。五曰、惡。六曰、弱。

註 凶者不得其死也。短折者横夭也。疾者身不安也。憂者心不安也。貧者用不足也。惡者剛之過也。弱者柔之過也。

II - 282

○筆を使ふ、舌を使ふが如く言はんと欲する所を言ひ語らんと欲する所を語る。而して毫も渋滞せず又た蕪雜ならず、条理暢達、旨義明快真に快人の快語を聞かぬ。含蓄の余味は求む可らざるも、一字一句殆んど空彈なし。特に首章「東荷村を訪ふの記」は一部伊藤家の勃興史にして約五十頁に渉る長文とす。氣魄一貫儼筆を見ず、叙述の妙剪裁の巧実に老手と推さざるを得ず。

II - 283

○姑らく記者の見る所を以てすれば此書は春畝公の美所、長所、強所、善所、不用意の間に發揮したると同時に、公の周囲に關し幾多の必要なる知識を与へたるが如し。⁽¹⁸⁾何人も公が余りに偉大なるが爲めに、公の父母に就て夫人に就て將た其の家系に就て多大の注意を払うたるものあらず。されども此書を一読したるものは公の出身の微賤なりしに係らず、其の家系は所謂碧血の一たるを知らむ。其の父母も亦た尋常人ならず、特に父十藏翁の如きは一種の快男児たるを知らむ。特に夫人に就て語る所多からざるに拘はらず、公の生涯に於て夫人は確かに或物たりしことは割切に印象せらるゝを見る。而して其の恩師米原良藏の一節に於て最も親切痛快とす。著者此に於て春畝公不言の意中を得たるに庶幾し。

II - 284

○公句あり、曰く、「七分忠節三分俠、忠俠併來作一人」と。而して公は此の以外に幾許の釋氣を雜へたるが如し。此釋氣や実に公を一般社会に繋ぎ得たる紐帶にして、公が不世出の顯榮を博し嫉妬の中心点に立ちつゝ尚一般社会より愛慕せられたる所以蓋し此所に存せざんばあらず。

II - 285

○人走り馬走り車走る。往く者は營々来る者は惺々、風塵歩に従つて捲く処履声車声に入つて喧轟相乱る。渾円球上の活舞台亦以て熾なりと謂つべし。

II - 286

○朝野人士の実歴を蒐輯せんとするにあり。編中の人物時に世上の知名あり。時に市井草沢の隱士あるも試に其事業を窺へば即ちこれ粒々辛苦の跡にして、咀嚼し反噬し来れば悉く実行の指針なり。若し夫れ処世の正道を愆らさんと

欲せば亦以て好箇の範例たるに値す。

II - 287

○浅薄なる群盲の知識に誤ひ、或は人の非行を指摘して奸計至らざるなし。或は社会風紀の隆汚を云為し、或は青年元気の盛衰を絶叫するも、爾かも改善実行の問題を解決するや、鮮矣。苟くも真箇の憂を当世に頒ちて惻怛の情に堪へざるあらば、顧みて而して一箇の実行を求めよ。胡為れぞ一言一行眼前の時局に効果あらん事を期せざる。吾徒不敏と雖も亦実行の要務を聞く。即ち本書は這般の提供に過ぎざるなり。

II - 288

○諸君は教育に関する国家の法律命令を知れるを以て足れりとすべからず。必ず法律命令の背後に存する深き意義をも味はざるべからず。諸君は現代の世界を解し、現代の日本帝国を解し、日本帝国は現代に於て如何なる臣民を要するかを解せざるべからず。我一身は微なりと言ふこと勿れ。此の如くして諸君は始めて国家教育機関の権化たるを得べきのみ。

II - 289

○徳川時代の御役人と云ふものは小禄のものと雖も、猶ほ自ら矜るの意ありたり。そは彼が身を以て治国平天下の事業を為すべき大社会の一員に列するを自覚したればなり。学校の先生にして若し我は国民を教育すべき一大階級の一員たりと自覚せんには何ぞ自ら侮ることを得んや。

II - 290

○明哲保身存察微英雄就事乗機。

II - 291

○吾人は只だ一個の訓言を固執して總ての時処位を問はず之を応用するが如き愚を做す可らず。古人も兵法の妙は運用如何のみと云へり。

II - 292

○卿は我が处在を搜がさんとして苦心し賜ふこと勿れ。余が家を出ずるは浮世の紛紜より遁れて平和を求めんが為なり。余が家に在るの間は或は来客に接し、或は写真師の為に囲繞せられて曾て安慰を得る能はず。余は八十二歳の今日に至りて余の精神と肉体とに平和と安息とを与ふるが為に家を出づるの已むを得ざるを感ずと。其情恰も昔者釈

迦が金殿玉楼を棄て山中に入り以て靜思冥想の地を求むるに似たり。

○警世醒俗の心

II 293
II 294

○世道人心

II 295

○後藤男の立場は苦い。其職に在る以上は何か手柄を立てねばならぬ。手柄を立てるには智力の有り丈を尽さねばならぬ。智力の有り丈を尽すには精勵せねばならぬ。精勵するには計画の妙を究めねばならぬ。計画の妙を究むるには意気の鋭敏を奮るはねばならぬ。此等の諸要点を実際に活動させるには平生の公心を基礎とせねばならぬと云ふ様に、総ての行為に波動して来る。後藤男の自鞭自撻は貧乏と云ふ大きな棒が威嚇物となりて発動したのである。

II 296

○後藤男の美德として資性の善良、友誼の濃厚、度量の浩濶、公心の旺盛、信念の強固等之れを秩序的に咄して世人の誤解を正したい事もある。

II 297

○官民の均く守るべき義務とも謂つべきものより話さう。官民の均く守るべき義務とは何ぞや。曰く、第一、朝鮮人を侮る勿れ、第二、朝鮮人を欺く勿れ、第三、輕信する勿れ、第四、輕挙する勿れの四則である。

II 298

○生命は君の賜なり。余はその賜をとりて力のかぎり啓蒙向上せしめ置きたれば、今之を君に返すに當りて衷心の愉快を抑ゆること能はず。

II 299

○陛下が御仁慈、御儉徳の盛んなるを思ふ毎に上下一致、寤寢奉公の誠意を忘る可らず。

II 300

○たとえば此に狂暴無道の説を唱え好んで人心を煽動するものありとせよ、国家直ちに此輩を敵視し之と是非曲直を争はんとする。是れ民をして之を知らしむるものなり。議論は大抵水掛論なり。声の大なるもの勝つ。国家を以て此輩と争ふは是れ国家自から小にするものなり。国家直ちに此輩と争はず、先づ国民の衣食を足すの道を講じ、山中茅屋

の民と雖も、猶ほ国家の恩沢を感ぜざる、こと能はざらしめ、人民の良心を信じ、其自制の徳を信じ、其他は則ち之を自然の醒覺に、一任せば、狂者は黙し、愚者は覚り、久して自ら化すべきのみ。民は之に由らしむべく之を知らしむべからずとは是也。

II - 301

○公は大藩の世子として其の英明の令聞は天下に隠れなかりしに拘らず、其の令聞は却て一身の不利となり、其周囲は実に敵国たりし也。公會て懷を述べて曰く、

笑の中に剣を含む世にしあれば、

うらみの程をいふ人もなし

誦し来りて今尚ほ憂心仲々の声を聞くが如し。然も公は如何なる逆境に処し如何なる迫害を受け如何なる父子兄弟の間を疎隔せんとする奸惡手段に罹るも、毫も其の心を動かさず、徹上徹下孝子たり、友兄たり。乃ち藩治に於ける不自然の状態は近藤崩れの如き大事を惹起したるに拘らず、公の一身に至りては其の一生を通じて何等の累を及ぼさざりしが、如きは其の高明大度の致す所なる乎。抑も亦た心地醇厚、性情和平の然らしむる所なる乎。

II - 302

註

(1) 明治二十二年十月十日枢密院議長の辞表を提出。

(2) 明治二十二年十月十八日玄洋社社員来島恒喜の爆弾投擲により負傷。

(3) 『吳越春秋』に見える名劍の名。

(4) 中納言紀長谷雄。

(5) 明治二十四年二月十八日歿。

(6) 明治二十三年十一月〜二十四年二月の第一帝國議會で商法実施延期議決。

(7) 配布資料の作成に多用された簡易印刷。蒟蒻粉を使う。

- (8) 明治二十四年十月二十八日発生。
- (9) 工藤行幹衆議院議員の口癖。「緊急動議」の訛。初期議会の「名物」と言われた。
- (10) 文久三年(一八六三)歿。三十三回忌は明治二十八年に当る。
- (11) 伊藤博文か。
- (12) 明治三十三年九月結成。
- (13) 子爵渡辺国武。本項は三十三年十月の心機一転事件か三十四年四、五月の募債問題での奇行を指すものと思われる。
- (14) 孟子「吾善養吾浩然之氣」。
- (15) 戦艦「八島」と「初瀬」明治三十七年五月十五日旅順港外において触雷のために沈没。「巡洋艦」とあるのは誤り。
- (16) 安政三年(一八五六)歿。
- (17) 桂内閣か。(その1)の註(24)は誤り。(その1)の挿み込み別紙は256、275項の草稿と思量される。
- (18) 伊藤暗殺(四十二年十月)直後の伊藤ブームの際に刊行された伊藤伝の一冊に関する書評か。筆者不詳。
- (19) 第二次桂内閣(明治四十一年七月成立)で通信大臣として初入閣。

【その1】正誤

頁行	誤	正
144頁5行	昭憲皇太后	昭憲皇太后
144頁13行	第二次伊藤内閣	第一次桂内閣

「長崎省吾関係文書」を本学に御寄贈下さった長崎歌子刀自は、昨冬逝去されました。ここに生前の御厚情に重ねて感謝申し上げます。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。